ユースティアの少女魔道師

迷いの森

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ユースティアの少女魔道師

【Ｎコード】
Ｎ２３１３Ｗ

【作者名】
迷いの森

【あらすじ】
この世界ユースティア、魔法が当たり前に存在し、その魔法を用いて様々な国が発展していた。そんな国々の一つ、魔法大国と言われている国キャナル、その国の北にそれほど大きくないレミアミルと言う町があり、その町の近くの森の中に一人の少女が暮らしていた。彼女の夢は様々な魔法を使いこなす魔道師になること、そんな彼女の夢を叶えるための旅が始まる

第1話　魔法が使えない少女（前書き）

初投稿です。尚、冒険物の予定なので魔物等との戦闘も考えてＲ１５と致しました。誤字脱字等ありましたらどんどん御教え下さい。

第1話　魔法が使えない少女

アリス「出ない・・・いや、もう一度！」

小川の流れる森の中で一人の少女が魔法の練習をしていた。彼女の名はアリス＝フェルマン、年齢は１４か１５歳、銀色の髪で整った顔立ち、そして白い肌の十分に美人と言われる容姿の少女だった。

アリス「火はこの手に集う、ファイアーボール！」

彼女が練習しているのは魔法の中でも最も基本的な攻撃魔法であり、日常生活で最も多用する魔法の一つだった。そして少しでも魔力があれば誰にでも使用できる魔法でもある」

アリス「なんで出ないのよ・・・」

しかし、いくらやっても火の玉どころか火の粉一つ出せないでいた。さらに数回ためしていると、近くの町から鐘の鳴る音が聞こえた。

アリス「あ！もうこんな時間なんだ、行かないと」

そして、少女は鐘が鳴った方角に走り出した。

アリス「やっば、もう始まってる！」

彼女は、その町で一番大きな建物の前に来た。天辺に大きな鐘が取り付けられ、ステンドグラスが嵌め込まれている、どうやら教会のようだった。その教会の礼拝堂の椅子に十数人の子供達が座っていて、前に出て話をしている４０代前半の男性の話に耳を傾けていた。

少女はゆっくりと扉を開けて中に入る、すると前に立ち話していた男性が少女に気付き話し掛けた。

男性「遅刻ですよ？アリス」

アリス「ごめんなさい、アラン神父さま」

アラン「それでは早く席につきなさい、授業を始めます」

アランに言われアリスは空いていた一番後ろの席に座った。すると、隣の席の少女がアリスに話しかけてきた。

少女「おはようアリス、最初の授業で遅刻なんて悪だね～」

アリス「おはようティア、ちょっと森で魔法の練習してたら時間忘れちゃって」

ティア「そうだったんだ。で？うまく出来た？」

アリス「それが全然ダメ、手順は合ってるはずなのに・・・あ、始まるよ」

アラン「皆さん、おはようございます」

一同「おはようございます」

アラン「今日から皆さんは本格的に魔法を学ぶことになります。前回の授業である程度の説明は行いましたが一応復習していきましょう」

そしてアラン神父は魔法の大まかな説明を始める。

魔法の属性は火、水、土、風、そして特殊な属性である空、時、幻の計７種類、通常、人が行使できる魔法の属性は火、水、土、風の４種類、俗に特殊属性と呼ばれる残り３つは生まれながらに特異な魔力を持つ人間しか行使できない、さらに特殊属性に適正のある人間はその３つの内の１つしか行使できない上に通常の４属性も行使できない、ちなみに、ここ数十年、特殊属性の使い手は現れていないという。

アラン「さて、なにか質問はありますか？」

元気そうな少年「空や時の属性の魔法を使える人はどうなるわけ？」

アラン「その人は名のある魔道師の所に預けられ魔法を教わると聞いたことがあります」

元気そうな少年「魔道師の人に？」

アラン「私も詳しくは分かりません。本人に会ったこともありませんからね、さて、他には？」

アリス「はい、それって強制なんですか？」

アラン「預けられることですか？そうですね、聞いた所今まで断った人はいないそうですが、詳しくはわかりません」

アリス「へ～」

アラン「他に質問は？」

ティオ「はい、特殊属性の人は見分けられますか？」

アラン「さて、どうでしょうね？私はただの神父で魔道師ではありませんからね」

ティオ「そうなんですかー」

アラン「さて、思ったより時間がかかりましたね、質問はこれくらいでこれから魔法の実演を行います」

アランは自分の前に腕を突き出し手のひらを上にして呪文を唱えた。

アラン「水はこの手に集う、アクアボール」

アランが呪文を唱える、すると手のひらサイズの水の塊が現れた。

アラン「これは最も簡単な魔法の一つです。皆さん、水をイメージしそれが手のひらに集まるように念じて呪文を唱えてください」

そして子供達がそれを真似て実践してみると次々と成功していった。

アラン「出来た人はうまく出来ない人にコツを教えてあげてください」

少年「へへ、これくらい予習してきたんだから余裕だぜ」

少女「簡単すぎるよね」

教室にいるほとんどの生徒が成功していった中、一人だけ何度やっても出来ない生徒がいた。

ティオ「がんばれアリス！とにかく集中して！」

アリス「水はこのこの手に集う、アクアボール！う～！はぁ～！ふぬうううう！」

中々愉快な声を出しながら集中しているが手のひらサイズの水どころか水滴一つ出ていない少女がいた。無論アリスだ、すると一人の少年がアリスに向かって歩いてきた。

少年「お～い、いくらなんでも想像力乏しすぎないか？これめちゃくちゃ簡単だぞ？」

アリス「うっさい！こっちは本気でやってるんだからリスターは黙ってて！」

リスター「てめ！自分が出来ないからって八つ当たりすんな！」

ティオ「こらこら、喧嘩しない！リスターもアリスは今真剣なんだから黙ってなさいって」

リスター「ふん！こいつがあんまり下手だから手伝ってやろうと思っただけだって」

アリス「下手で悪かったわね！そういうあんたも」

アラン「はいはい二人ともそこまで、アリス、ゆっくり集中してもう一度やってみなさい」

アリス「あ、はい！」

しかしやはり何も起きなかった。

アラン「うーん、それでは他の属性の魔法も使って試してみてください」

そして一通りの魔法を試すもやはり何も起こらなかった。

アラン「ふむ、仕方ありませんね、後でアリスは残りなさい、他の生徒は次の魔法に移りましょう、アリスはしばらくアクアボールの練習をしていなさい」

アリス「は～い・・・」

リスター「おい、アリス」

アリス「何よ？」

アリスは少し不機嫌そうにリスターに返事をする

リスター「水は川でも湖でもいいからそれを手のひらで掬うようにイメージしてみろよ」

アリス「え？あ、ありがとう、やってみる」

リスター「ま、精々がんばれよ」

そしてリスターは一番前の右の席に戻っていく、そして授業が終わる頃までアリスは練習していたが、結局アクアボール一つ出来なかった

アラン「それでは皆さん、さようなら、今日習ったことを来週までしっかり練習しておいてください」

一同「はい、ありがとうございましたー」

第1話　魔法が使えない少女（後書き）

初の投稿です。冒険で魔物との戦闘等も考えてR15と致しました。
誤字脱字等ありましたらどんどんお教え下さい

第2話　適正検査

お昼になり、皆家に帰っていった、しかし礼拝堂には3人の子供が残っていた。

アリス「はぁ～」

ティオ「そんな溜息つかないの、終わるまで待ってるからさ？」

リスター「まあ俺も暇だし、お前がアランのおっちゃんに怒られてる所でも見て暇つぶしするかな」

アリス「ありがとうティオ！リスター、あんたは帰れ」

リスター「そう邪険にするなって、さっきはちゃんとコツ、教えただろ？生かせてなかったが」

アリス「う・・・でも出来ないんだってば・・・言われたようにやったんだけど」

ティオ「もしかしたらアリスって特殊属性に適正があるのかも」

リスター「バーカ、ただ魔法が下手なだけだって」

アリス「ふん、下手で悪かったわね！」

そんなやり取りを行っていると、礼拝堂の奥の扉からアランが出てきた

アラン「おや、二人ともまだいたのですか？」

ティオ「付き添いです」

リスター「俺もで～す」

アリス「あの・・・だめですか？」

アラン「いや、大丈夫ですよ、それほど時間もかからないでしょうし」

そう言うとアランは懐からビー玉のような透き通った石を取り出した。

アリス「アラン神父、それは？」

アラン「いや、大した物じゃありません。ちょっとした検査ですよ、アリス、この石に魔力を込めてくれますか？」

そう言ってアランはアリスに石を渡す、その光景を見ていたティオとリスターはアランに向かって尋ねた。

ティオ「検査って、もしかして特殊属性の！？」

リスター「マジかよ！検査方法あったのかよ！」

アラン「あったんですがあのままだと話がずれそうだったのでね」

アリス「なんで検査？」

アラン「魔法が使えない子には必ず検査することが決まっているのですよ、一応ね？皆さんには言ってませんでしたが」

ティオ「そうだったんですか」

リスター「おいアリス！早速やってみろって！」

アリス「うん、行きます！」

そうしてアリスは石に魔力を込めるため集中していく。

リスター「ちなみに適正があったら石が変化でもすんの？」

アラン「その属性に応じた色に変化します、時なら黒、空なら金、幻なら銀色になります。ちなみにこれは刻石と言って特殊属性以外の魔力には反応しません」

ティオ「へー」

そして１０分ほど経ったが石は一向に変化しなかった。

アリス「はぁぁぁぁ！ふぬうううう！」

リスター「ふぁ～」

ティオ「変わらないね～」

アラン「そろそろやめましょうか」

アリス「うぅ・・・はい・・・」

そしてアリスはアランに刻石を返した。アリスはどよ～んとした雰囲気を出しながらガックリと肩を落としていた。

アラン「まあそうがっかりしないで」

リスター「そうだって、これで原因はお前が下手だからってわかったんだしさイテ！」

リスターにティオから拳骨の制裁が与えられた。

だが、ティオもアリスも１５５くらいの身長であるのに対し、リスターは１７０以上もあるため近くのイスの上に乗って拳骨である。

ティオ「もう少し言い方考えなさい、そんなことばっか言ってるとアリスに嫌われるわよ？」

リスター「おい！？」

アリス「なんで私？」

アラン「若さっていいですね～」

と、そんなやり取りをしていると一人の修道女がアランを呼びにきた。

アラン「おや、シスターセシル、何かありましたか？」

セシル「アラン神父、もうすぐにお客様が到着します」

アラン「もうそんな時間ですか、分かりました、それでは二人とも気をつけて帰りなさい」

アリス「ありがとうございました」

ティオ「また来週もよろしくお願いします」

リスター「じゃあなおっちゃん。またなー」

そう言って3人とも帰っていった。

第3話　神父の客人

少しすると3人と入れ違いに一人の古いローブを纏った人間が教会に入ってきた。

そして神父を見つけると近づき軽く会釈して話しを始める。

ローブの人「システア＝アルベンだ。貴方が神父殿か？」

アラン「はい、アラン＝リーガルです。こちらは修道女のセシル＝コルベル」

セシル「セシルです。よろしくお願いします」

そしてお互い挨拶が済んだところでシステアが口を開く。

システア「頼んでいた物は用意出来ていますか？」

アラン「こちらです」

するとアランは懐から小さな香水のビンのような容器を取り出した。中には青い液体が詰まっている。

システア「失礼」

システアはその容器を受け取り中の確認をする。

システア「素晴らしい・・・これならば・・・」

セシル「その薬の材料であるリリア草はこの近くにある森のかなり奥まで行かなければ取れません。それに強力な魔法の媒体にもなるため悪用されれば厄介です。ですから・・・」

システア「分かっている、他言はしないし使用目的も先に言ったとおりだ」

アラン「我々も貴方が悪用するとは思いません。貴方の大切な人を救えることを祈っています」

システア「感謝する」

そしてシステアはそのまま出口の扉の方へ向かって歩き出そうとしてぴたりと止まった。

システア「やはり妙な魔力を感じる」

システアの呟きにアランとセシルは首を傾げる。

アラン「妙な？」

システア「なにか特異な・・・混ざったような、なにかおかしな物は持っていませんか？」

アラン「はて・・・少々お待ちを」

そしてアランは懐を探りさっきある少女の適性検査に使用した刻石を取り出した。

アラン「これは・・・」

セシル「まあ・・・」

システア「ほお・・・おもしろいな」

その刻石は見事に黒、銀、金の順で地層のように色が分かれていた。

システア「この石を使ったのはさっきすれ違った子供の誰かだな？」

アラン「は、はい、銀色の髪の少女です」

システア「あの子か・・・どこに住んでいる？」

アラン「町を出た少し先にある森の中の小屋で一人暮らしをしています」

システア「そうか、分かった」

そしてシステアは足早に教会の扉に向かい今度こそ出て行った。

アラン「あ、行ってしまいましたね・・・」

セシル「あの子の『ペット』のことは言わなくて良かったんでしょうか？」

アラン「まあ、それほど時間も経っていませんし彼女なら追いつけるでしょう、万が一のことがあっても強力な癒しの魔法も使えるでしょうしね」

場所は変わって町の中、二人の少女と一人の少年が3人で歩いてい

た。

少年の方は栗色の髪に茶色の目、少しやんちゃそうな少年だ。

片方の少女も茶色の目に肩位の髪、容姿はかわいいという印象の少女である。

しかし、もう一人の少女は銀色の髪が腰の辺りまで伸びて顔立ちも大人っぽい印象の少女で町の中の人とは違った雰囲気を出していて目立っていた。ちなみに町の人々は皆髪も瞳も茶色か茶色が混ざる黒だ。そんな色々目立つ3人の中の少年が口を開いた。

リスター「あの教会の入り口の所ですれ違った奴、誰だったんだろうな？」

ティオ「ローブを深く被ってたから顔は見えなかったよね」

アリス「アラン神父の言ってたお客さんってあの人だったのかな？」

リスター「でも怪しすぎるだろあれは」

アリス「でも、もしかしたら魔法使いの人かもしれないよ～？」

と、三人で話しているとアリスが何かを思い出したように声を上げた

アリス「あ！グゥちゃんに今日門の所で待っててもらうように言ってたんだった」

ティオ「そうなの？それじゃあ早く行ってあげないと」

リスター「最近森も物騒だが、あいつがいれば安心だからな」

アリス「うん、じゃあそう言うわけで先帰るね」

そういうとアリスはパタパタと門に向かって走っていった。

第４話　護衛わんこ？

ティオとリスターが再び歩き始めると後ろからローブ姿の人が近づいてきて二人に話しかけた

システア「君たち、少しいいか？」

話しかけられたため二人が後ろを向くとローブを深く被った怪しい人間がいた。

あまりの怪しさに二人とも思わず眉をひそめた

ティオ（教会の入り口ですれ違った・・・）

リスター（やっぱり怪しすぎるだろ・・・）

そんな二人の胸中を察してかシステアはすぐに自己紹介をした

システア「いやすまない、決して怪しいものじゃない、私の名はシステア、少し用事があって教会を尋ねたのだ。実は君たちの友達の中に銀髪の女の子がいたはずなんだが彼女はどこに行ったか分からないか？」

一応自己紹介をされたのでまだ警戒しつつも名乗り返す

ティオ「ティオです。」

リスター「リスターだ。なんでアリスを探してるんだ？」

システア「う～む、彼女に少し大事な話があってね」

リスター「大事な話ね～、じゃあもう一つ、なんで教会に来てた訳？」

システア「あの教会のアラン神父に用事があった」

リスター「じゃあアランのおっちゃんの客人ってやっぱりあんたか」

ティオ「それなら言っても大丈夫かな？」

リスター「まあそうだな、アリスは一足先に家に帰ったぜ」

ティオ「門の方に向かったけど今からなら走れば間に合うんじゃないかな？」

システア「そうか、感謝する」

システアはそう言って門の方に向かおうとしたがそこでリスターが話しかけた

リスター「アリスの家の場所、わかるか？森に続く道に沿っていけば着くぜ」

システア「道に沿ってだな、感謝する、それでは」

それだけ言ってシステアはまた早足に町の出口に向かった

リスター「森の近くにも魔物が出るのに大丈夫なのか？」

ティオ「まあそんなに強いのは出ないし大丈夫なんじゃないかな？」

そう言って二人はしばらくシステアの後姿を眺めていた

そして場所は変わって門の前、端のほうで大人しくお座りをする狼のような生き物がいた。

グロウウルフといわれている生き物で、銀色の毛並みに鋭い牙と爪を持った魔物だがそんな獰猛そうな外見とは裏腹に知能が高くプライドも高い、しっかりと敬えば主を護るため他の魔物とも戦ってくれる実に頼もしい存在である。

そんなグロウウルフに近づく少女がいた。

グロウウルフはその少女の姿を見るなり立ち上がり近づいてきた。

アリス「グゥちゃんお待たせ～」

グゥ「グゥ～」

グゥはアリスの足元に擦り寄ってきて唸っている、待たされて少し不機嫌そうだ。

ちなみに大きさは大型の犬ほどもあるのでかなり迫力があるがアリスは慣れた手つきで頭を撫でて謝っている

アリス「ごめんね？怒ってる？」

グゥ「ウ～」

アリス「今度市場でおいしいお肉買ってあげるから許して？」

グゥ「ウォン！」

やっぱり分かりやすいな～、などと心の中で思いつつ微笑むアリスだった。

ちなみにこの辺りで主に食べられる肉はリブナルという大人しい魔物で大きさは牛くらい、全体は茶色で頭に2本の角を持っている、ミルクも採れるし肉も少し硬いが味は悪くないため結構人気がある

アリス「よし！それじゃあ帰ろっか？」

グゥ「ウォン！」

そしてアリスとグゥは町の門を抜け少し先にある森の中にある小屋に向かうのだった。

それから少しして門の前にシステアが到着した。

システアは辺りを見渡したがアリスらしき少女はいないためこれからどうするかを考えていた。

システア「さて、追うか、一旦宿に戻って昼食を取るか・・・」

時刻は午後1時を回っていた。さすがにこのまま町の外まで追いかけるのかどうか迷っていると

近くにいた若い旅人が二人組みの自警団に何か話しているのが聞こえてきた。

若い旅人「森の近くを通ったときレッグベアの鳴き声を聞いたんだ」

中年の自警団「レッグベアか、厄介だな、普通ならもっと森の奥にいるものなんだが・・・」

彼らの言うレッグベアとは、外見は普通の熊とそう変わらないが一回り大きく、脚力がかなり発達していて力も強い、この辺りでは最も厄介な魔物だった

若い自警団「あの森には採取目的でよく人が出入りしますからしばらくは立ち入りを禁止にしましょう」

中年の自警団「しかたないな、多分群れからはぐれてここまで出てきたんだろう、俺から団長に報告を入れておく」

その話を聞いたシステアはすぐにアリスの後を追うことにした

システア「やれやれ、これじゃあ昼飯は後回しだな・・・」

そう呟くとシステアはローブを深く被りなおし一人、少女を追いかけ森に向かった

第5話　レッグベアとの戦闘

アリスとグゥは森までの道を早足で歩いていた。

早く家に帰って昼食を食べるためだ。

結局3人で話しながら歩いていたり教会で適性検査をしていたため
いつもより大分遅くなってしまった。

いつもは町で食事をして帰るのだが今日はグゥがいるためそう言う
訳にはいかなかった

町には基本魔物は入れないのだ。

グゥは決して人は襲わないがそれでも怖がる人はいる、グゥもそれ
を理解しているため門の前で大人しく待っていた。

ちなみにアリスの家までの距離は徒歩で４０分、急げば３０分とい
う距離にある森の中である

アリスとグゥは森の入り口に立った時点で何かの気配を感じていた

アリス「グゥちゃん、何かいるよね？」

グゥ「ウオー」

アリス「辺りに注意して慎重に進もう？」

グゥ「ウォン！」

そう言ってアリスとグゥは森の奥へと進んでいった

グゥがいればこの辺りにいる大抵の魔物は追い払えた。

今までもそうだったため今日も大丈夫だと、そう思っていた。

それから少し遅れてシステアが森の入り口の所まで辿り着いた。

システアは辺りを見渡すがやはり誰もいなかった

システア「やはりもう森に入ったか、だが近いな・・・何とか追いつくか？」

そう独り言を呟いて森の中へ続く道へと足を踏み入れた。

道はある程度整備されており、馬車1台程度なら多少余裕を持って走れるほどの道幅があった。

森の中、アリスとグゥは家までの道の中頃で止まっていた。

1人と1匹の前には巨大な体を持ったレッグベアが道を塞ぐように後ろ足2本で立ち上がりこちらを威嚇していた。

距離はアリスが多少大股で１０歩前後の距離、グゥが何かの気配を感じ止ったと同時に脇の林から道に飛び出してきたのだ。

そのまま道の真ん中で立ち上がり威嚇され動けない状態になってしまった。

レッグベア「グォォォォ！」

アリス「なんでこんな所にレッグベアが・・・」

グゥ「グルルルル！」

グゥも牙を剥き出しにして相手を威嚇するが相手はまったく意に介していない。

レッグベアの大きさはアリスの2倍近くあり、そんなのが立ち上がってこっちを威嚇するだけで足が竦むほどの恐怖だ。

とにかく、アリスはもと来た方向へゆっくりと後退る、だが・・・

アリス（来る！）

そう思ったと同時にレッグベアは前足を地面に下ろし四つん這いになったと同時に後ろ足で地面を蹴り上げ迫ってくる、巨体ながらその強靭な脚力からの突進で大股１０歩ほどの距離など一瞬で詰めてくる、アリスは咄嗟に左に飛んで避ける、そして獲物を逃してレッグベアが1度方向転換するのと同時にグゥが飛びつく

グゥ「ヴゥゥゥ！！」

レッグベアの耳に噛み付くグゥ、それを振り払おうと暴れるレッグベア、それを見たアリスは咄嗟に腰に刺さっているナイフを抜いた。

しかしナイフの刃渡りは果物ナイフほどしかない短めのものだった。

アリス（これで突っ込むのはいくらなんでも危険すぎる、でもこの

ままじゃグゥが！）

アリスが考えている間にレッグベアの強力な腕の一撃で耳に噛み付いていたグゥが地面に叩きつけられた。

アリス「グゥ！？」

手の甲で払われる形になったグゥはよほど強く叩きつけられたのだろう、ぐったりとして起き上がらない、レッグベアはグゥの方を向き立ち上がりその爪で体を切り裂こうとした。

グゥはレッグベアの後方に叩きつけられたためその方向に向いたレッグベアはアリスに後ろを向けていた。

アリスはナイフを構えてレッグベアに向かって走り出した。

アリス「グゥから離れなさいよ！この化物めぇぇぇぇぇ！！」

そしてアリスのナイフはレッグベアの背中に突き刺さる

レッグベア「グオオオオオオ！！」

だが振り向いたレッグベアの腕に一撃で吹き飛ばされる、アリスはそのままグゥと同じように地面に叩きつけられた

アリス「痛い・・・う・・・」

強く叩きつけられたためすぐには起き上がれそうにない

レッグベアはアリスの前までやってきて今度こそその爪でアリスの

体を引き裂こうと腕を上げる

アリス（この馬鹿力め・・・どうしよう・・・絶対死んだ・・・）

そう思った瞬間自分達が来た方の道から声が聞こえてきた。

それは呪文のようだった。

システア「水は刃となり我が敵を切り裂け、アクアカッター！」

そう聞こえたと同時に振り上げていたレッグベアの腕が肩の辺りからすっぱりと切り落とされた。

レッグベアが叫び声を上げる前にさらにもう一撃加えられレッグベアの首が空中に舞った。

それと同時にその巨体が横にぐらりと揺れそのまま地に伏した。

ゆっくりと声が聞こえた方向を見ると青い色の髪を短く切った２０代前半の女性が走ってきた。

そして、女性がアリスを抱きかかえ、早口で捲し立てた

システア「おい！怪我は無いか！？私の声は聞こえるか！？」

アリス「あ・・・私は大丈夫です。それよりグゥを・・・」

それだけ言うとアリスは気を失った。

第5話　レッグベアとの戦闘（後書き）

今日初感想頂きました！とても嬉しかったです！
これを励みにこれからもがんばろうと思います！

第６話　魔道師システア

しばらくしてアリスが目を覚ますと、見慣れた天井が目に入った。
ゆっくり起き上がり周りを見渡すとやはりそこは自分の部屋だった。
誰かが自分を家まで運んでくれたようだと、そこまで考えた所で自分の部屋の扉が開く、現れたのは青い髪の２０代前半の女性だった。
彼女はアリスが起き上がっているのを見ると部屋に入ってきて話しかけた。

システア「目が覚めたようだな、急いでいたから君が持っていた鍵を使って勝手に入らせてもらったよ？」

アリス「あ、確かレッグベアに・・・」

そこまで言ったところでアリスは何かを思い出したように捲し立てた。

アリス「グゥは！？私と一緒にいたグロウウルフはどこですか！？」

システア「落ち着け」

システアがそう言うと同時に部屋の中にゆっくりとした足取りでグゥが入ってきて、ベッドの近くまでやってきた。

アリスはベッドから飛び降りてグゥに抱きついた。

アリス「よかった・・・ほんとによかった・・・」

グゥ「クゥ～ン」

システア「一通り怪我は治したからとりあえず心配はいらないだろう」

アリス「あなたが助けてくれたんですよね？ほんとうにありがとうございます！」

アリスは膝を付いてグゥを抱きしめながら礼を言った。

システア「いや、実際君を守ったのはそのグゥだ。グロウウルフは賢いから普通なら自分より強い相手とは戦わない、よほど君のことが大事だったのだろう」

アリス「はい・・・ありがとう、グゥ・・・」

アリスはもう一度髪の青い女性にお礼を言おうと思ったが、まだ自己紹介をしていないことを思い出し慌てて自己紹介をした。

アリス「あ、私はアリス、アリス＝レファルです。アリスと呼んでください」

システア「私はシステア、システア＝フローン、システアで良い、実は君を探していた。いきなりだが大事な話がある」

そう話を切り出そうとした時ぐぅ～とシステアのお腹が鳴った。

システア「・・・」

アリス「あ、もしよければ何かお作りします。助けてもらったお礼がしたいですし、話は食事の後でも」

システア「いや、うん、そうだな・・・頼む・・・」

家にあるリブナルの干し肉をスープにして、パンを用意する。随分と遅めの昼食だ。

グゥも端の方で同じ干し肉をかじっている。

時間はもう午後3時前というところか、この昼食だけで、2日分ほどあったアリスの家の食料は青い髪の女性たった一人にほとんど平らげられてしまった。

システア「美味いな、特にこの肉が良い、味付けが私好みだ」

アリス「あ・・・あはは・・・気に入ってもらえてよかったです・・・」

そしてお互い食べ終えたところでシステアが再び話し始めた。

システア「さっきの話の続きだが・・・」

アリス「確か大事な話があるんでしたよね？」

システア「ああ、君は・・・魔法をどう思う？」

アリス「魔法ですか？もちろんすごいと思います！水を出したり火を出したり！実は私、魔道師になるのが夢なんです！」

システア「ほお？魔道師ね・・・だがそれを名乗るにはそれなりに魔法を極めなければならないが・・・なにか得意な魔法でもあるのか？」

アリス「それが、私才能が無いみたいで全然魔法が使えないんですよね～」

と、そこでアリスはレッグベアに襲われた時のことを思い出した。

アリス「そういえば、システアさんが使っていたのって魔法ですよね！？あんな強力な魔法初めて見ました！レッグベアを一瞬で倒してましたよね！？」

レッグベアが現れたときは最低でも大の大人3人以上で戦うのが基本だ。

しかも、今回現れたレッグベアはかなりの大きさだった。

5人がかりでも安心できないだろう。

アリス「そんなのを一撃なんてすごいですよね！」

システア「まあ今回は不意打ちが成功したからな、それよりもアリス、君は魔道師になりたいと言ったな？その言葉は嘘じゃないな？」

アリス「え？もちろんなりたいです。でも・・・」

アリスが一言言い終わる前にシステアが力強く言った。

システア「よし、なら私の弟子になれ」

アリス「へ・・・？」

唐突すぎて一瞬思考が追いつかなかったアリスだがすぐに言葉の意味を理解した。

アリス「弟子・・・ということはシステアさんって、魔道師の方なんですか！？」

この世界で言う魔道師とは、魔道ギルドと呼ばれる組織から認められ、弟子をとり魔法を教えることを許可された人間のことを指す。

それ以外で魔法を使う人は魔法使いと呼ばれ彼らは弟子をとることは出来ない、さらに、ただの魔法使いと違い、魔道師にはいくつか特権があって、馬車の値段が安くなる、何か1つの依頼を別の人間と取り合いになっても優先して受けることができるなどをはじめ他にも様々な優遇がある。

（補足、生活に使うような簡単な魔法を教えるくらいなら別に許可は要らないため、アランが魔法を教えるのは問題ない）

ちなみに魔道師に正式に弟子入りを認められた人間は魔道師見習いとなり、特別にいくつかの特権を使用できるようになる。

システア「まあな、で？弟子入りするのか？」

アリス「も、もちろんです！私なんかで良いなら是非！」

システア「よし、なら出発の準備をしろ」

アリス「はい！・・・え？」

システア「ん？聞こえなかったか？出発だ、明日にはこの町を出る、旅支度をしておけと言ったんだ」

アリス「え？町を出るって・・・明日！？」

システア「私はこう見えて結構忙しい、この町での用事は済んだ、もういる意味が無い」

アリス「で・・・でも・・・」

システア「お前は魔道師になりたいと言っただろう、あれは嘘か？」

アリス「う、嘘じゃないです！でも・・・」

システア「よし、ならこうしよう、明日の朝まで待つ、私は町の宿に泊まっている、旅に出る決心がついたら私が泊まっている宿に来い、来なかったらこの話は無しだ」

そう一方的に言い終わるとシステアはアリスの住む小屋を後にし日も傾いた町への道を一人帰っていった。

アリスはしばらく呆然としていたがやっと我に返り言われたことを理解した。

そして・・・

アリス「いきなりすぎでしょう！？」

もうその場にいない人物に遅すぎた突っ込みをいれた。

第7話　手紙と旅立ちの決意

その夜、ベッドの上でアリスはずっと考えていた。

魔道師になりたいのは本当だ。

でも火の粉一つ出せない自分が魔道師に弟子入りなんて・・・実は騙されてるのかも・・・いや、あの魔法の腕は本物だ。それに本気で魔道師を目指すなら独学で魔法を学ぶよりは魔道師の下について教わるほうが何倍も近道だというのも分かってる。

アリス（でもいきなり町を出て旅なんて・・・）

アリスはそこで迷っていた。

この町にはティオやリスターがいる、髪の色が原因で仲間外れされていた自分に初めて出来た友達だ。

アリス（それにこの家だって・・・）

アリス（おじいちゃん・・・私どうすればいいかな・・・？）

アリスは物心付く頃にはこの小屋で一人の老人と生活していた。

町では変わり者といわれていたがとても優しくて大事な家族だった。

そんなおじいさんが亡くなったのは1年前、享年73歳だった。

おじいさんが亡くなった時は悲しかったがいつまでも悲しんではい

られない、そしてアリスはおじいさんが飼っていたグロウウルフ、グゥと一緒に魔物を狩り、その素材を売ったりして生活していた。
魔道師になりたいと思ったのはそのおじいさんの影響で、昔は魔道師として世界中を回ったと言う武勇伝を子供の頃から聞いて育ったからだ（どこまで本当かどうかわからないが）

アリス「そういえば・・・」

アリスはおじいさんが亡くなる前に言った言葉を思い出した。
それは、『もし、わしになにかあったらわしの部屋のベッドの下を調べなさい』

というものだった。

当時はおじいさんが死んだことが悲しくてすっかり忘れていた。
アリスは昔、おじいさんが暮らしていた部屋にあるベッドの下を調べた。

すると、手に何か袋のようなものが当たったためそれを引っ張り出す。

アリス「なんだろう・・・これ・・・」

蝋燭を近くに置いてその袋の中を確認する、すると

アリス「き・・・金貨・・・？」

その中には合計２５枚もの金貨が一通の手紙と一緒に入っていた。
アリスは早速袋から手紙を取り出し読み始めた。
手紙にはこう書かれていた。

おじいさん『アリスへ、お前がこの手紙を読む頃にはわしはもうこの世にいないだろう、袋の中にある金貨はみたか？あの金貨は全てお前のためのものだ。わしはお前に世界を見て回って欲しい、世界はいいぞ！危険もあるがなにより楽しい！実際に見て回ったわしが言うのだから間違いは無い！もし、お前にその気があるのなら旅に出ていろんな所を回り見聞を広めてほしい、無論お前の意思が一番大切だ、ここが気に入っているならその金貨を使ってほしいものでも買うといい、でももし旅に出るなら、その金を旅の資金にしなさい、そして夢があるならその夢も全力で追うといい、グゥも一緒につれていけばわしはかなり安心できるから是非連れていきなさい、さよならアリス、愛しているよ・・・追申、教会のアランに金を借りたままだった。返すタイミングを逃したため、すまないが金貨５枚あいつに返しておいてくれ、おじいちゃんより』

アリス「おじいちゃん・・・お金は生きてる内に返そうよ・・・」
とそんな泣いていいのか呆れていいのかわからないおじいさんからの手紙に突っ込みを入れつつアリスは一つの決心をした。

翌日

旅支度を整えたアリスは家の裏にあるおじいさんの墓の前に立った。
町の人からは変わり者だと思われていたようだが亡くなった時は意

外と多くの人が集まって、墓を作ってくれた。案外、嫌われていた訳ではなさそうだ。

そんなおじいさんの墓にアリスは話しかける、横にはグゥも一緒だ。
アリス「おじいちゃん、手紙読んだよ、私、おじいちゃんが言ったみたいに旅に出ることにする、魔道師の人に弟子入りすることになったの、どこまでやれるか分からないけどおじいちゃんがしたみたいに世界を回る、それでいつか立派な魔道師になる、それまで帰って来れないかもしれないけど見守っていてね？」

グゥ「クゥ～ン」

おじいさんへの挨拶を終えたアリスはしっかりと小屋に鍵をかけ、お金を持っておじいさんとの思い出の
小屋を後にした。

アリス「これからよろしくね？グゥ」

グゥ「ウォン！」

そして一人と一匹はシステアの待つ宿に向かう。

第7話　手紙と旅立ちの決意（後書き）

かなり無理やりだったし、いきなりすぎると反省しているのですが
とにかく早く旅に出たい！なんて思ったためこのようになりました。
なんだかんだでやっと旅立ちです。
1日1話更新出来たらいいなと思って書いてます。
読んでくれてる画面の向こうの皆さん。
ありがとうございます！これからもがんばっていきます！

第8話　リスターとシステア

町に着いたアリスはシステアの泊まっている宿に向かって歩いていた。

ちなみにグゥは首にリードのような細めの鎖を付けて一緒に歩いている。

町ではしっかりと鎖さえ着ければよほど凶暴な魔物ではない限り入れるのだが、グゥは普段嫌がって決して鎖を着けさせない、だが今回は仕方が無いのでグゥも大人しくアリスの言うことを聞いた。

今いるのは市場のような所で、色々な食材が売られてる、あっちこっちで商品を売る威勢の良い声が響いていた。

そんな色々な店が立ち並ぶ通りの向こうから良く見知った顔が近づいてくる、ティオとレスターだ。

向こうもこちらに気付いたようで近づいてくる。

レスター「ようアリス、買い物か？」

ティオ「おはようアリス、グゥも連れてるなんて珍しいわね？」

アリス「おはよう二人とも、ちょっと宿に用事があってね」

レスター「ふーん、あ！そういえば昨日かなりでかいレッグベアが出たそうだな、お前大丈夫だったか？」

アリス「ああ・・・うん、この通りなんとか怪我はなかったよ」

ティオ「え！？出くわしたの！？よく無事だったね？」

レスター「なんか自警団が話してるのを聞いたんだけど腕と首がばっさり切り落とされてたらしいな、なんか知ってるか？」

レスターによると森の様子を見に行った自警団が道の真ん中辺り倒れているレッグベアを発見して誰がやったのか調べているらしい。

その時、ついでに死体も回収したようだ。

道理で道にいなかったはずだ。

そのことを聞いたアリスは、システアが名乗り出ていないのなら勝手に言わない方が良いかとも思ったが、この二人なら大丈夫だろうと、あまり他の人に話さないように釘を打って昨日のことを話した。

レスター「へえ、あのローブの奴そんな強かったのか、まあ・・・お前に怪我がなくてよかったぜ、とこでなんか荷物が多いけどどっかいくのか？」

アリス「うん、その・・・」

アリスは言うべきか一瞬悩んだが、ここまできたら今更黙っているようなことではないと思い直し、その人と旅に出ることを伝えた。

ティオ「旅に・・・」

レスター「出る！？」

一瞬驚いた声を上げた二人だがすぐに捲し立てるようにアリスに話しかける。

ティオ「いつまで！？なんの目的で！？」

レスター「旅ってどこに行くんだよ！？大体、昨日今日あった奴と二人でなんて危険すぎるだろ！？」

自分を心配してくれる優しい友人二人を宥めつつアリスはその人は多分信用できると思っていること

と、自分の決心が揺るがないことを二人に伝える。

アリス「私、どうしても世界を見て回りたい。多分今日行かなかったとしてもいつか絶対旅に出ることになると思う、それなら信用できそうで強そうな人と一緒に回るほうが絶対に安全だと思うから」

アリスがそう言うとティオはなんとかわかってくれたようだった。

だがリスターは納得できないという顔をしている。

ティオ「まあ、アリスがそこまで言うならその人は信用できるのかも、昔から人を見る目だけは確かだしね」

リスター「俺は認めねえぞ、そんなに言うならそいつの所に連れて行け！俺が信用できるかどうか直接確かめてやる！！」

アリスは迷ったが、リスターは昔からこうなると絶対に譲らない頑固な所があるため仕方なく3人で宿に向かうことにした。

3人は宿に着いたので早速システアのことをフロントの人に聞いてみた。

するとついさっき教会に向かったと言われたためアランにも用があったアリスはちょうど良いので3人

で教会に行くことにした。

教会に着くとフードを深く被ったシステアが礼拝堂の入り口の扉の所でアランと話をしていた。

アリスを先頭に3人はシステアに近づき話しかけた。

アリス「システアさん！」

システア「ん？おお、アリスか、決心はついたのか」

アリスが返事をしようとするとそれを遮るようにリスターが割って入った。

リスター「あんただな、アリスをそそのかして旅に連れ出そうとしてるのは」

システア「そそのかす？何のことだ？」

ティオ「ちょっとリスター、やめなさいよ」

ティオが宥めようとするがリスターは聞かない

リスター「ティオは黙っててくれ、あんたシステアとか言ったな？もしアリスを旅に連れ出すなら俺を倒してからにしろ、魔道師なんだからそれくらい簡単だよな？」

この会話でシステアはある程度のことを理解した。

システア（なるほどな、まあ、この手の子供は一度やり合わないとまず納得しないか）

そしてあえてその挑発に乗ることにした。

システア「威勢がいいな？そういう奴は嫌いじゃない、いいだろう、相手してやる」

そこまで黙って事の成り行きを見守っていたアリスはここにきてやっと口を開いた。

アリス「あの・・・ごめんなさい、でも言っても聞かなくて・・・ほどほどに相手をお願いします」

アリスもリスターの性格を良く分かってるので止めることはしない、ティオも同様だ。

だがさすがにレッグベアを2発で仕留めるような実力者だ。

リスターの身が心配になる、そんなアリスにシステアは軽く手を振って答える。

システア「まあ、構わんさ、子供相手に本気は出さないし、私もこういう奴は嫌いじゃない、そこで見ているといい」

リスター「子供子供って言ってくれるな・・・吠え面かくなよ？」

アラン「ふむ、なんだかよく分かりませんが、勝負なら教会の裏でお願いしますよ？」

アリス（止めないんですね、アラン神父・・・）

と、アリスは一瞬思ったが、自分も止めてはいないので口に出すことはなかった。

第9話　アクールの水精

場所は移り教会の裏手、結構な広さがあるこの場所で頭から深くかぶっていたローブを外し、青い髪を出したシステアとリスターがお互い向かい合っていた。

リスターの手には訓練用の木刀が握られている、まさに一触即発という雰囲気だった。

リスター「あんた女だったのかよ」

システア「声を聞いたら分かるだろう」

リスター「ずっとローブ深くかぶってた上にまだ合うのは2度目なんだから気づかねえって」

システア「そうか？1度目はともかく今回はてっきりアリスのことで頭がいっぱいだったのかと思ったんだが」

リスター「な！？」

アリス「リスターってば、そんなに心配してくれてたんだね」

ティオ「う～ん、まあ心配もあるとは思うけど・・・」

アラン「若いですね～」

グゥ「ウォン！」

リスター「そ・・・そんなことより早く勝負だ！たとえ女でも手加減はしないからな！」

システア「ああ、全力で来い」

その言葉を最後に辺りの雰囲気が張り詰めた。

ティオ「リスター・・・本気だね」

アリス「うん、真剣な顔してる」

実はリスターは将来自警団に入ることを目的にしているため、よく他の団員に混じって訓練している、実際かなり強く、もう十分に1人前と呼べる位の力はあった。

だが・・・

リスター（打ち込めねえ・・・）

システアはただ立っているだけで特に何もしていないのだが、リスターはまったく動けないでいた。

しかし、その実システアはたとえリスターがどう動いても即座に対応できるように常に動作一つまで監視していたのだ。

システア「どうした、来ないのか？」

リスター「っち・・・うおおおおおお！」

このままでは埒が明かないとシステアの挑発を受けリスターが真正

面から突っ込む。

システア「正面からとはいい度胸だ！」

リスターが木刀を振り上げてシステアに切りかかる。

だがそれをシステアは造作も無く避ける。

さらに横薙ぎに木刀を振るうリスターだがシステアは後方に飛びこれも避ける。

リスターはそれを追い再び木刀を何度も振るうがまったく当たらない。

システア「分かり易過ぎるぞ？」

リスター「くっそ！」

そんな攻撃がしばらく続きリスターも息が上がってきたところ。

システアは口を開く

システア「もうやめろ、お前では私に術を使わせることも出来ない」

それを聞いたリスターは剣を振るうのをやめ、目の前のシステアを見据えて言った。

リスター「あんたが強いのは理解した。俺なんかじゃ悔しいが逆立ちしたって勝てないかもな」

システア「案外物分りが良いな、どんな時も冷静な判断が出来る奴は長生きできる」

納得したかと一瞬気を抜いたシステア、しかし次の瞬間

リスター「でも1発くらい入れねえと納得できねえええええ！！」

リスターは木刀をシステアに投げつけた。

咄嗟にそれをシステアは避ける、だが一瞬の隙を突かれたシステアの目の前にはリスターの拳が迫っていた。

そして

システア「風よ、去なせ」

システアがそう言うと、システアの周りに風の鎧が出現しリスターの拳を受け流した。

そして、体制を崩したリスターの腹に蹴りを入れる。

リスター「ぐふ！」

そのままリスターは後ろに転がった。

その瞬間、勝負は決まった。

システア「すまん！つい反射的に蹴ってしまった」

リスター「い・・・いや、大丈夫だ・・・」

そしてリスターはよろめきながら立ち上がる。

システア「まったく、あそこで突っ込んでくるとは」

リスター「1発も喰らわせずに負けるってのは悔しかったからな」

リスター「ま、結局だめだったけどな」

システア「かなり無茶だったが私に魔法を使わせたんだ。そこは誇っていい」

勝負を終えた二人からはピリピリした雰囲気は消えていた。

そして勝負を見ていたアリス達が集まってくる。

アリス「おつかれさま、リスター」

ティオ「システアさん強いんですね！びっくりしました。」

アラン「いいものを見せてもらいました、風の魔法も実にお上手で、さすがはアクールの水精、他属性の魔法も実にお上手で」

アリス「アクールの水精？」

アラン「彼女の通り名です、水の魔法にかけては天才と言われている魔道師なんですよ、ちなみにアクールは水の魔法で発展している国で、彼女の故郷でもあります。」

ティオ「アクールの出身だったんですか、だから髪が青いんですね・

・・って、アラン神父・・・知ってたんですか？」

アランは白々しくわらって誤魔化した。

リスター「なんでローブをかぶってたんだ？」

システア「この町には異国の人間が少ない、あまり目立ちたくなかったんだ」

この世界では国や地域によって髪の色が変わる、この国キャナルは大地の属性が強く現れているため、

その国の人間の髪の色は茶色っぽくなる。

水の国アクールでは青、火の国フレリアでは赤、風の国ウィルデンでは緑の色の髪をした人間が多い、

ちなみにこの世界にある国はこの４国のみである。

システア「で？納得してもらえたか？」

リスター「ああ、付き合ってもらって悪かったな、戦ってわかった。確かにあんたなら信用できる、だけどどうしても認めたくなくてさ・・・」

気持ちはわかると、システアはリスターに告げアリスの方を向く、そして口を開く。

システア「お前はいい友達を持ったな」

アリス「はい、ありがとうございます」

システア「それで、まだ直接返事を聞いていないが、どうするんだ？」

アリス「私を・・・システアさんの弟子にしてください」

システア「よく決断したな、私が持てる全ての知識や技術をお前に教えてやる」

アリス「はい！よろしくお願いします！」

そして一悶着あったがアリスは正式にシステアに弟子入りして共に旅に出ることが決まった。

第9話　アクールの水精（後書き）

誤字、脱字、ご感想等ありましたら是非お願いします。

第１０話　旅立ちと短剣

アリス達は教会の裏手から正面へと移動していた。

そしてアリスは思い出したようにアランに祖父の借りていたお金のことを伝える。

アリス「あ、アラン神父に渡さないといけないものがあるんです」

そしてアリスは腰に下げた袋から金貨を5枚取り出しアランに渡す。

この世界では銅貨４０枚で銀貨１枚、銀貨２０枚で金貨１枚になる、銀貨１枚でこの町にある宿に、朝と夜の２回の食事つきで２泊出来るため、かなりの大金だということが分かる。

アラン「この金貨は・・・」

アリス「おじ・・・祖父がアラン神父にお金を借りていたと手紙にあってそれを私から返しておいてほしいと書かれていたんです」

もちろんそれは祖父が残していたお金で私のではありません。

とアリスは付け加える。

アラン「ふふ・・・そうですか・・・」

そう呟くと神父はアリスに待っているように伝え教会の中に入っていく。

そして、出てくると何かを持っていてそれをアリスに渡した。

アラン「貴方のおじいさんから預かっていたものです。お返しします。」

アリス「え？」

それは銀色の１振の短剣だった。

刃渡りは３５ｃｍほどで幅は７ｃｍほど、飾り気の無いシンプルな作りだがどこか神聖な感じの漂う剣だ。

アリス「あ、あの・・・」

ティオ「へえ・・・？飾りはないけどすごく綺麗な剣ね？」

リスター「ああ、結構良さそうな剣だな」

各々興味津々に剣を眺めていたが、システアだけは驚いた顔で剣を眺めていた。

システア「これは・・・ミスリルか？」

アラン「ほお、わかりますか」

システア「間違いない、とても強い魔力を秘めている、まさかこんな所でこんな素晴らしい剣を見ることになるとは・・・」

アリス「あの、この剣ってそんなにすごいんですか？」

システア「ああ、私ならこの剣に金貨５０枚は出す」

リスター「き・・・金貨５０枚！？」

ティア「す・・・すごい・・・」

アリス「お・・・お返しします！」

アラン「返すと言われてもね、それはもう貴方の物です。旅に持っていきなさい」

アリス「で・・・でも・・・」

アラン「ふむ、では少しお話しましょうか」

アランによると、その剣はアリスのおじいさんが買ったもので、当時、この剣を買うために金を溜めていたおじいさんは、どうしても金貨５枚だけ足りなかったため、アランに貸してもらえるよう頼みに来たのだという、アランは最初は断ったがおじいさんがある賭けを持ちかけたため、金を貸すことにした。

その条件は、まず、アリスが金貨５枚を返しに来ること、２つ、アリスが旅に出ること、この二つの条件が同時に揃わなかった場合はその短剣はアランに譲る、揃えばその短剣を旅に出るアリスに渡すと言う物だった。

ティオ「聖職者なのに・・・」

レスター「賭けかよ・・・」

アラン「ははは、昔は私も若かったですからね～」

やはりアランは笑って誤魔化した。

アラン「とにかく、そう言う事で、その剣はもう君のものだ、だから好きに使うといい」

アリスはまだ迷っていたが、システアがアリスに言った

システア「受け取れ、その剣は言わばお前のおじいさんの形見だ。大事に使わせてもらうといい」

その言葉でアリスは決心が付いたようだ。

アランに向き直り言った。

アリス「アラン神父、ありがとうございます。大事に使わせてもらいます」

そして、システアは宿に荷物を取りに行きアリスはティオ、レスター、アランの３人と首都方面に向かう馬車の乗り口まで来た。

しばらく４人で話をしていると荷物を持ったシステアが馬車にのって戻ってきた。

アリス「わざわざ専用の馬車を頼んだんですか・・・？」

システア「初弟子祝いだ。少し位奮発してもバチは当たらんさ」

ちなみに、専用の馬車を用意するとなれば大体銀貨１０枚は必要となる。

一般家庭の1ヶ月の収入が大体同じ位なのでかなり高額だ。

そしてアリスは馬車に乗り窓から3人に別れを告げる。

アリス「それじゃあ行ってくるね！」

ティオ「怪我には気をつけてね！」

リスター「なんかあったらすぐ戻って来いよ！」

アラン「貴方達の旅が、実り多き物になることを祈っています」

システア「またいつか会おう、それまで精々腕を磨けよ、リスター」

リスター「次は絶対に1発入れてやる！覚悟しとけよな！」

そして二人はレミアミルの町を後にした。

第１０話　旅立ちと短剣（後書き）

やっと旅立ちです。ほんとはアランさんとおじいさんの過去とか色々やりたいこともあったんですけど、出来れば１０話で切りよく旅立ちしたかったため今回は見送りとなりました。また機会があればやって行きたいです。

第１１話　道中の自主訓練

この国、キャナルの首都までおよそ馬車で2日、それまで時間はたっぷりある。

馬車は４人ほど乗れる位の大きさで床にはグゥが寝そべっている。

アリスとシステアの二人は向かい合うように座っていて、今後のことについての話をしていた。

システア「やはり最低限、自分の身を守れるくらいの実力はつけなければな」

アリス「じゃあやっぱり接近戦の訓練とかですか？」

システア「まあ、それも大事だがお前は魔道師になるんだから今は魔法を覚えた方がいいだろう」

アリス「じゃあシステアさんがレッグベアを倒したときに使った魔法が使いたいです！」

システア「ああ、言い忘れていた。お前にあれは使えない」

アリス「ええ・・・そうですか・・・あ、じゃあリスターの攻撃を受け流したあの風の魔法がいいです！」

システア「あれも無理だ」

アリス「そ・・・それじゃあファイアーボールとか・・・」

システア「言い忘れていたが、お前に風、水、火、地属性の魔法は使えない」

システアはきっぱりと言い放った。

アリスは一瞬呆然となったがすぐにシステアに理由を聞く

アリス「な・・・なんでですか！？」

システア「お前には特殊属性の魔法に適性がある、だから他の属性は使えない」

アリス「へ？」

システア「特殊属性だ。それも時、幻、空の3属性を使える可能性がある」

アリス「な！？」

システア「面白いだろ？だからお前を弟子にしたんだ」

アリス「面白いって・・・それだけのために・・・？」

システア「無論それだけじゃない、お前のその才能を開花させたいという思いも勿論ある」

アリス「むぅ・・・でも私、検査受けたんですけどなんの反応もありませんでしたよ？」

システア「刻石か、お前の場合3属性の適正を持ってたからな、元々そんな事例は今まで無かった。何らかの理由で反応が遅れたんだろう。」

アリス「で・・・でも、それが本当だとして私にどんな魔法が使えるんですか？特殊属性の魔法なんて1つも知らないんですが・・・」

システア「そこは心配するな、自分の手に負えない奴を弟子になんてしない」

そして、システアは懐から古びたノートのような物を取り出した。

アリスはそれを渡され中を見てみると、そこにはぎっしりと特殊属性の扱う主な魔法が記されていた。わかりやすく解説や、たまに絵で説明しているところもあった。

システア「私が世界中回って書き記した魔道書だ、1冊しかないからな、絶対無くすなよ？」

この世界の魔道書は、見たら命を落とすとか、呪われるとかは無く、単に魔法を使うためのコツや、呪文等を記した物であり、魔道師なら皆持っている魔法の取扱説明書のようなものだ。

腕のいい魔道師などは、自分が新しく作った魔法などを書き記したりするものもいる、そしてその魔道師が死んで、さらにそれを継ぐ弟子や家族がいないときは、魔道師ギルドがそれを預かり、よほど危険な魔法ではない限り全ての魔道師に開放するのだ。

無論、余程危険だと判断された場合はその場ですぐ焼き討ちとなる。

アリス「でも・・・これってシステアさんの大切な物では？」

システア「どうせ私には意味の無い物だ。使える奴が持っているのが1番だ」

アリス「あ、ありがとうございます！」

システア「しばらくは自力で調べて試してみろ、分からない所がある時は私に聞け。あと、危なそうな魔法は馬車の中ではやるなよ？」

それだけ言うとシステアはしばらく寝ると言って横になってしまった。

アリス「なんか・・・すごい放任主義・・・」

グゥ「クゥ～ン」

そして、数時間が経ち、辺りが少し暗くなった頃、目の前に休憩所が見えてきた。

休憩所は、その道を通る馬車や旅人のための施設で、簡単な食事や、寝床などを提供してくれる。

無論、お金は必要だが。

休憩所に入ると、二人は早速部屋を借りるために、この施設の管理人の所へと向かった。

第１２話　不穏な気配

この休憩所は２階建てで、１階は小さな酒場になっていた、２階の部屋が寝泊りするための部屋である。

一応、何人かが雑魚寝するための部屋もあるが、こっちは一応女二人なので、金を払い部屋を取ることにする。

ちなみに馬車の運転手は食事だけここで取り、寝るのは馬車の中である。

管理人「いらっしゃい、女二人で旅行かい？」

中に入ると早速酒場の店主が話しかけてきた。

どうやら彼が酒場の管理人のようだ。

口の周りに髭を生やした５０代前半位の男性だった。

システア「ああ、部屋を頼みたい、ベッドは二つで頼む」

管理人「銅貨２５枚だ」

システア「ペットがいるんだが構わないか？」

管理人「ん？グロウウルフか、他の客に迷惑かけなければかまわんよ」

システア「そうか、感謝する」

そしてシステアは金を払い部屋の鍵を受け取ってアリスと共に2階へ上がっていった。

部屋に着くと二人は荷物を降ろし、すぐに食事のため下に下りる準備をする。

アリス「グゥちゃんは待っててね？後でご飯持ってくるから」

グゥ「ウォン！」

システア「アリス、旅の資金はいくらあるんだ？」

アリス「アラン神父に金貨5枚渡したので、あと金貨２０枚と銀貨2枚，それと銅貨が何枚かですね」

システア「ふむ、かなりの大金だな、金貨はこの部屋に置いていこう、グゥ、鍵は掛けておくが、もし、誰か来たらすぐ吠えて知らせるんだ。頼むぞ？」

グゥ「ウォン！！」

そして二人は下に降りていった。

酒場に来るとさっきはいなかった4人組の集団が酒場の端の席で酒を飲んでいた。

システアは店主に彼らは誰か聞いてみた。

システア「さっきはいなかった客だが、彼らは？」

管理人「ん？ああ、首都からここまで魔物除けの護符を届けに来た冒険者だ。あんたらが上にあがったのと入れ違いで入ってきたんだ」

町や村の周囲には、魔物を遠ざける効果のある護符を取り付けている、ただ、効果は半年ほどしか持たないため半年に1回取り替える必要があるのだ。

システア「なるほど、もう設置は終わったのか？」

管理人「いや、今日はもう遅いから設置は明日になる、心配しなくても今晩くらい今の護符でも十分持つさ」

システア「そうか」

それだけ聞くとアリスとシステアは出てきた料理を平らげ、管理人を交えて話を始めた。

管理人「改めて自己紹介をする、ここの管理人をやってるリーガンだ、あんたらはレミアミルの町から来たのかい？」

システア「システアだ、私はレミアミルの町で1泊してその後首都に向かう途中だ。」

アリス「アリスです、私はレミアミルの外れに住んでいたんですけど、システアさんに誘われて一緒に旅に出ることになったんです。」

リーガン「へえ、じゃあまだ二人は知り合って間もないのかい？」

アリス「そうですね・・・まだ1週間もたってないですね・・・あ

！すいません。私達が連れてきたグロウウルフにご飯を持っていってあげたいんですけど、何かありますか？」

リーガン「おお、ちょっと待ってな」

そう言って店主は台所の方へ姿を消した。

戻ってくると結構大きな肉の塊を持っていた。

リーガン「こんなもんでいいか？」

アリス「十分ですよ！あの、御幾らですか？」

リーガン「銅5枚・・・といいたい所だが3枚でいいぞ」

アリス「あ、ありがとうございます！」

そして肉を受け取ったアリスは早速グゥに持って行った。

少し遅くなってグゥは不機嫌そうだったが肉をあげると、すぐ機嫌を直してくれた。

そして、アリスは戻ってきてしばらくリーガル、システア、アリスでおしゃべりをするくらい打ち解けていた。

リーガル「システアさん、あんたはアクール出身だろ？」

システア「そうだ、今は旅をして世界を回ってる」

リーガル「へえ、じゃあアリス、あんたはこの国の出身なのか？」

アリス「一応、物心付く前からレミアミルの祖父の家で暮らしてました。」

リーガル「そうか、いやあ、珍しい髪の色をしていたから気になってな、今までそんな綺麗な銀色の髪は見たことが無い」

アリス「私、昔祖父に拾われて育てられたんです。」

システア「それは初耳だな、そんな過去があったのか」

リーガル「なんかすまなかったな、気を悪くしないでくれ、こういう所で働いていると旅人の話を聞くのが楽しみになっててな、その銀色の髪はよく似合ってるぞ？」

アリス「ふふ、ありがとうございます。」

そして、時計が１０時近くを指していたため二人は部屋に戻り休むことにした。

システア「なかなか悪くない味だったな」

アリス「確かにおいしかったですね」

グゥ「ク～ン？」

システア「そういえば、魔法の方はどうだった？」

アリス「あ！よく聞いてくれました！実は自分でも驚く位上達したんですよ！」

システア「ほお？それはすごいな、明日是非見せてくれ」

アリス「はい！あ、そういえば時の魔法の中に時読みって言うのがあったんでやってみたんですけど」

時読みとは、術者に関係のある未来の出来事を映像として垣間見ることが出来る時の魔法である。

システア「ふむ、で？結果はどうだったんだ？」

アリス「それが・・・かなりの数の魔物が見えたんですよね・・・」

システア「魔物？詳しく話せ」

アリス「は、はっきりとは分からなかったんですけど、なんだか何処かに向かってる感じが・・・」

システア「時読みで分かるのは術者に関係のある未来のみだと言うが・・・嫌な予感がする」

そういうと、システアは急に目を閉じて集中し始めた。

システア「水語りという魔法だ、私を中心に半径数百メートルの中にある水を通してその周囲の情報を断片的にだが得ることが出来る」

アリス「そんな魔法もあるんですね」

システア「まあ、私のオリジナル魔法の一つだ」

そして、しばらくするとシステアは苦々しい顔をして目を開け、言

った

システア「今すぐ武器を持って下に下りるぞ」

アリス「え？なにかあったんですか？」

システア「魔物だ、詳しい数までは分からんが、相当数が魔物除けの護符を越えてここに向かってる」

アリス「な！？」

システア「早く準備しろ、急げ！！」

そして、アリスは短剣を持って先に行ったシステアを追って1階に下りた。

第１３話　戦闘開始

１階の酒場に着いたシステアは、大声で酔いつぶれた冒険者や、他の客を叩き起こす。

システア「お前たち、今すぐ起きろ！！」

アリス「ちょ・・・システアさん・・・」

リーガン「お・・・おい、一体どうしたんだ？」

アリス「えっと、その・・・」

システア「魔物だ、かなりの数の魔物がこの休憩所を目指して進んで来ている」

リーガン「な、何を言ってる、この休憩所の周りには護符がある、魔物などありえない」

システア「残念だが、もう護符の結界は越えられた、距離は大体ここから四、五百メートルと言った所か」

リーガン「そ、そんな馬鹿な！何かの間違いじゃないのか！？」

？「いや、その女の言うことは多分本当だ。さっきから嫌な気配が近づいてやがる」

リーガルとシステアの会話に割り込んできたのは、システアと入れ

違いで入ってきた冒険者４人組の１人だった。
背中に大剣を背負い、かなりの重さがありそうな鉄製の鎧を着込んでいる３０代前半の男性だった。
？「急に割り込んですまない、俺はガルシア＝アルベン、一応冒険者ギルドの冒険者だ」
アリス「どうも、アリスです。」
システア「システアだ、一応魔道師をやっている、これが証拠だ」
システアは懐からカードのようなものを取り出した。
このカードはギルドＩＤと呼ばれていて、ギルドにおける身分証明書である、ギルドに所属している者は皆持っている。
カードには所有者の名前、称号などの情報が細かく書き記されている。
そこに記されている称号を見てガルシアは驚きの声を上げた
ガルシア「アクールの水精！？」
システア「システアで良い、それに今はそんなことを気にしている場合ではない」
ガルシア「そ、そうだな、しかし、アクールの水精が言うことならまず間違いない、マスター！今すぐバリケードの準備だ！俺は他の仲間を叩き起こしてくる。あんたらは先にバリケードの設置に取り

掛かっていてくれ」
ちなみに、バリケードは木製の柵で高さは９０ｃｍほど、簡単に設置できるが耐久度はかなり低い
リーガン「わ、わかった！」
システア「了解した」
アリス「は、はい！」
そして、ガルシアが仲間３人を連れて外でバリケードを組んでいるシステア達に近づいて来て口を開いた。
ガルシア「今戦えるのは俺たちだけで他の客は全員一般人だ」
システア「そうか、大した魔物ではなさそうだが数が多そうだからな・・・そこが多少心配だな」
私達５人で捌けるか・・・そう呟いたシステアにアリスが話しかけた。
アリス「あの・・・私達も戦います。」
グゥ「ウォン！！」
システア「なに？」
ガルシア「そういえば彼女は誰なんだ？」
システア「私の弟子だ。まだ正式な登録は済んではいないがな、そ

のために首都にある魔道ギルドの支部に向かっていた。」

ガルシア「ということはそこそこ魔法が使えるんだな？ならこっちから頼みたい所だが・・・」

システア「まだ早い、まだほとんど訓練もしていない、危険だ」

アリス「大丈夫です。森に住んでいた時には何度か魔物とも戦ってグゥと協力して倒したりしていましたし」

システア「だが・・・」

ガルシア「実は・・・言いにくいんだが俺以外の奴はほとんど戦力に入れないほうが良い、なんせ魔物が倒せないから護符の運搬なんて依頼を受けた奴らだからな、俺はその付き添いだったんだ、おまけに全員まだ酔ってる・・・」

そして、後ろの3人を見ると確かに足取りもおぼつかない、見てて頼りなかった。

システア「そいつら、仕事してる自覚は無いのか？」

アリス「それなら私達、きっと力になれると思います。お願いします！」

システア「・・・はあ、わかった、だが無茶はするな、それと危険そうな魔法は使うな、これは師匠命令だ。いいな？」

アリス「・・・わかりました」

ガルシア「よし、そうと決まれば全員戦闘に備えろ！」

そして、バリケードの設置が終わると、全員外側で戦闘準備に入る、ちなみに、バリケードの内側５０ｍほどの所に休憩所がある。アリス、システアは前衛の冒険者４人の後ろから魔法による支援と言う形になった。

ガルシア「二人とも、魔法は何が使える？」

システア「回復、攻撃魔法は一通りいける」

アリス「いくつか覚えましたけど使ったことはありません・・・」

ガルシア「使ったことが無い・・・？」

システア「気にするな、いざ戦闘が始まれば何とかなる」

ガルシア「ほんとに大丈夫なのかよ・・・」

システア「それよりあんたたちはどんな魔法が使える？」

ガルシア「全員日常生活で使う位の簡単な魔法しか使えない、戦闘じゃ役に立たないだろう」

システア「そうか、わかった」

そして、会話が途切れると少し先からウォオオオオオオオン、と魔物の遠吠えが聞こえてきた。

ガルシア「この鳴き声、ロアウルフか？」

ロアウルフはこの辺りに生息する肉食系の魔物で、グロウウルフの

ように1匹～3匹で行動して基本的に人間には危害を加えないのに対し、常に10匹以上の集団で行動し、人間や動物関係なく襲い掛かる、一匹一匹は大して強くないが集団戦法が厄介な敵だ。

システア「暗いな、サンの魔法でこの辺りを照らすか？」

ガルシア「そうだな、出来れば頼む」

システア「分かった。偽りの太陽は夜の闇を照らす」
呪文を唱えると、空に火の球体が浮かび、辺りは小さな太陽に照らされ、大分明るくなった。

その瞬間、ロアウルフが一斉に冒険者たちに襲い掛かってくる。

ガルシア「来るぞ！構えろ！」

そして、戦闘が始まった。

第１４話　フレリアの魔塔

ロアウルフの数は２０匹近く、４人はシステアとアリスを守るように戦っていたが、ガルシア以外の冒険者は正に戦力外と言って指し違いなかった。

適当に剣を振り回しているだけで全然役に立たない、それに引き換えガルシアはその背中の大検を軽々と振り回し、すでに３匹のロアウルフを倒していた。

しかし敵の数が多すぎる、ガルシアだけではとても捌ききれないでいた。

ガルシア「システア！敵が多い！何とかならないか！？」

システア「数が多すぎて咄嗟に低級魔法で反撃するのがやっとだ！高位魔法を使う暇が無い！」

アリスとグゥもシステアを守るように戦っているがこちらも５匹以上に囲まれていて術の詠唱を援護する余裕が無い。

アリス「このおおおおお！」

グゥ「グルァァァァァ！」

グゥがロアウルフの一匹の喉元に喰いつき引き裂く、アリスも飛び掛ってきた１匹を避けすれ違い様に喉を切りつける、２匹仕留めたがそれでもなお、５匹以上の敵に囲まれ少しずつ押されていった。

皆傷だらけになって戦っている、その状況を見てアリスが言った。

アリス「システアさん！私、この状況を何とか出来そうな魔法を使えます！」

システア「それは危険なんじゃないのか！？」

アリス「それは・・・失敗すれば確かに危険ですけど・・・でも、絶対大丈夫です」

システア「大丈夫と言われてもな、それに、使うとしても呪文の援護などできる余裕は皆ないぞ！？」

アリス「呪文なら大丈夫です、それにこれなら何とかなりそうなんです！」

システア「だめだ！もっと訓練してからだ、覚えて１日も経たない魔法で実践など馬鹿げてる！」

しかし、そんなやり取りをしていると、ここから少し離れた所から遠吠えが聞こえてきて、さらに１０匹ほどのロアウルフがこちらに向かって走ってきた。

ガルシア「まずい！血の匂いを嗅ぎ付けて集まってきやがった！」

システア「っち、どうする・・・？」

他の冒険者も既に体力の限界のようで、お互いで背中合わせになって囲まれていた。

ガルシアもかなりの数に囲まれていて動けない。

その時、アリスが再びシステアに向かって言った。

アリス「システアさん、お願いします。私にやらせてください！」

システア「くそ・・・わかった。お前を信じよう、好きにやれ！」

アリス「はい・・・！」

そして、アリスは一歩前に出て魔力を練って呪文を紡ぐ、その間、アリスの周りに薄い金色のオーラのようなものが生成され、攻撃を加えたロアウルフを全て弾き飛ばした。

システア「無詠唱で防御魔法、それと並行で別の呪文を・・・？」

呪文は、使う魔法のイメージを正確に定めるために使うもので、自分の中に完全なイメージが出来ていれば、呪文は必要ない、しかし、それはとても高度な技で、イメージが中途半端なら暴走の危険すらある。

その光景にシステアは驚いたが、口を挟むようなことはなかった。

アリス「地にそびえ立つのは幻影の魔塔、その砲塔にて敵対者を殲滅せよ！」

アリスがそう唱えたと同時にバリケードの内側に高さ５０Ｍ、直径２０Ｍ以上はあろうかと言う巨大な塔が現れた。

それは元々そこにあったと錯覚するほどの圧倒的な存在感で下の戦

闘を見下ろしていた。
その塔の側面には無数の砲塔が付いており、その全てが下を向いて、ロアウルフを狙っていた。
その塔が現れた瞬間、危険を察知したのか周りのロアウルフの攻撃は止み、こちらに向かっていた新手のロアウルフ共々撤退を始めた。
一同が助かったのか？と、思った瞬間、アリスの張りのある声が辺りに響いた。
アリス「狙え！」
それと同時に塔の砲台が一斉に撤退を始めたロアウルフに向く。
アリス「撃てー！！」
そして、その掛け声を合図に、砲台から何百発もの弾丸が撃ちだされ、撤退中のロアウルフの上に降り注いだ。
アリス「攻撃停止！」
アリスが合図し、塔からの攻撃が止んだ時、そこには蜂の巣になった何十匹ものロアウルフが倒れていた。
そして、攻撃が終わった時、さっきの搭があった所は最初から何も無かったかのようにただの地面に戻っていた。
唖然としている冒険者3人の心の声を代弁するようにガルシアが口を開く。

ガルシア「とんでもない魔法だな・・・こんなの見たことがねえ・・・」

システア「フレリアの魔塔・・・まさか実物をこの目で見ることになるとは・・・」

ガルシア「聞いたことがない魔法だな？」

システア「数百年前、ある優れた幻魔法の使い手が作り上げたという魔法だ・・・結局、あまりにも高度な魔法の上、幻魔法の使い手など早々いなかったため、やがて忘れ去られた・・・」

ガルシア「幻！？てことはあの譲ちゃん・・・」

システアは口が滑ったか？と一瞬思ったが、それくらいなら隠す必要はないと思い直した。

システア「・・・そうだ、あいつは幻魔法の使い手で、私の弟子だ」

ガルシア「なるほど・・・あんたが弟子にするはずだな」

そう納得したガルシア達の所にアリスがグゥと共に走ってきた。

アリス「やりました！システアさん！私やりましたよ！」

システア「ああ、さすがは私の弟子だ」

グゥ「ウォン！」

システア「お前もよくがんばったな」

そして、その場でシステアが皆の怪我を魔法で癒し、もう辺りに危険が無いことを確かめて、全員宿に戻った。

第１５話　王都到着！

宿に着いた一行は、まず管理人や商人などの一般人に危険が去ったことを伝えた。

そして、とりあえずその日は何人かが起きて順番に見張りをすることになり、システア、アリス、グゥは部屋に戻ることになった。

部屋に入ってグゥは早々にアリスのベッドに潜り込んで、アリスもベッドに入り休もうとしたが、そこでシステアに話しかけられる。

システア「すまないアリス、疲れているかもしれないが、少し話をしないか？」

アリス「あ、はい、大丈夫ですよ？」

システア「手間は取らせない」

そして、アリスとシステアは部屋の窓の近くに備え付けられている椅子に向かい合わせで座った。

システア「早速だが、私の渡した本に書いてある魔法をいくつ覚えた？」

アリス「えっと・・・幻の魔法はほぼ全て覚えました。」

システア「ほぼ全て・・・？あの数を・・・？」

アリス「はい、と言っても実際使ったのはあのフレリアの魔搭と空

の魔法、リリデアの盾だけですが・・・」

システア「ということは上位魔法を同時発動、しかもその内一つは無詠唱で発動ということか・・・？」

アリス「は、はい・・・自分でも少し無茶かと思ったんですが、なんと。」

システア（リリデアの盾もフレリアの魔塔も単体で発動するだけでとんでもない魔力と技術が必要だと聞いたが・・・今更ながら何者だ？アリスは・・・）

アリス「あの・・・他に何かありますか？」

システア「あ、いや、聞きたいことは聞いた。疲れているし今日は休もう」

アリス「はい、今日はお疲れ様でした！」

システア「ああ、お疲れさま、明日も早いから寝坊するなよ？」

そして、二人はベッドに入りその夜はゆっくりと休んだ。

翌朝

朝食をとり荷物をまとめた二人は再び馬車で王都に向かう。

休憩所を出る際、ガルシアやリーガンが話しかけてきた。

ガルシア「もう出るのか？」

システア「今日中に王都に着きたいからな」

ガルシア「そうか、譲ちゃん、アリスって言ったな？」

アリス「は、はい！」

ガルシア「あんたは王都に着いたらどうするんだ？」

アリス「えっと・・・魔道師ギルドの登録を済ましたら一応冒険者登録もするつもりです。」

ガルシア「そうか、いつか譲ちゃんとも仕事が出来ることを楽しみにしてるぜ、それと、昨日はごたごたしてて言えなかったが、ありがとうな、譲ちゃん」

アリス「あ、はい！」

リーガン「またいつでも来てくれ、あんたたちならいつでもサービスさせてもらうよ」

システア「ああ、またいつか寄らせてもらう」

そして、二人は挨拶を済まし、休憩所を後にした。

道中、馬車の中

アリス「ガルシアさん達はいつ出発するんでしょう？」

システア「とりあえず、魔物除けの護符を取り付けてからになるだ

ろうから昼くらいだろうな」

アリス「じゃあ、王都到着は夜でしょうね」

システア「そうだな」

などと会話もそこそこに、何事もなく時間は過ぎていった。

夕方になった頃、前方に大きな町が見えてきた。

アリス「わあ～！システアさん！見てください！町ですよ！町！」

システア「分かったから落ち着け」

そして馬車は町に入っていった。

馬車の乗り口に止まり、二人は馬車から降りた。

アリス「すごい大きい町ですね！人もたくさん！」

システア「なんだ、王都に来るのは初めてか？」

アリス「はい！町はレミアミルしか知らなかったのでこんな大きい町があるなんて驚きです！」

システア「ふふ、それなら城なんて見たことが無いだろう」

アリス「お城があるんですか！？」

システア「ここからでも少し見えるぞ」

そう言ってシステアは西の方角を指差した。

そこには、とても大きな建物が見えていた。

アリス「あれがお城ですか～！」

システア「今日は宿に泊まって、また明日、王都を案内しよう」

そう言って二人は馬車の御者に挨拶を済まし宿を取るために城の方角に歩き出した。

第１６話　押しかけ弟子登場

町の大道りに面した所に良い宿があった。

２階建てで、少し古そうだが掃除も行き届いており客の質も悪くなさそうだ。

システア「ここにするか？」

アリス「そうですね、でもグゥちゃんは入れてくれるでしょうか？」

グゥ「クゥ～ン」

システア「ここでは冒険者などが多い、冒険者は魔物を旅に連れ歩く者が多いからそれは大丈夫だろう、無理なら他を当たればいい」

この世界の魔物は、ただ人を襲うだけのものだけではなく、しっかりと世話をすれば共に戦ってくれるものもいる、グゥがその例だ。

そのため、冒険者などが飼いならしていることも珍しくない、ちなみにその場合はペットと言う人間が多い。

アリス「はい、すいません・・・」

システア「気にするな」

そして、二人は早速部屋を取るため中に入った。

すると、４０代前半くらいの元気そうな女性が話しかけてきた。

女性「平和の宿、憩い亭へようこそ、お泊りかい？」

システア「ああ、だがその前に聞きたいんだが、この宿はペットも泊まれるか？」

女性「ああ、大丈夫だよ、うちは冒険者さんを相手に商売させてもらってるからね」

システア「そうか、ではここにしよう」

女性「毎度有り。じゃあお部屋はどうするんだい？」

システア「出来れば2階、窓側の二人部屋を頼む」

女性「はいはい、御1人様一泊銅２５枚になるが、いいかい？」

システア「ではとりあえず3日分だ。」

そう言ってシステアがお金を払おうとすると、アリスが割り込んだ

アリス「あ、あの！自分の分は自分で払いますよ？」

システア「今お前はあんまり細かい金はないだろう？それに、弟子の面倒を見るのも師匠の仕事だ。旅に誘ったのは私だしな」

アリス「でも、それじゃあ悪いですし・・・」

システア「ふむ、じゃあこうしよう、今回の宿代は私が払おう、その代わり、王都で仕事が入るかもしれないからその時は手伝ってく

れ、それ以降の宿代はお前が自分で払う、それでいいか？」

アリス「まあ、それなら・・・」

システア「決まりだな、では頼む」

女性「はいはい、ちょっとまってなよ」

そう言って女性はカウンターの方に入っていった。

少しして女性が戻ってくると、システアに部屋の鍵を渡し言った

女性「私はこの宿の管理をしているソフィアだ、なにかあったら遠慮なく言ってちょうだいね」

システア「ああ、しばらく世話になる」

アリス「お世話になります」

アリスが頭を下げ挨拶すると、ソフィアが笑って言った

ソフィア「礼儀正しい良い子だねえ、家の娘にほしいくらいだよ！」

システア「ふふ、残念だが予約済みだ」

アリス「え？」

ソフィア「あっはっは、そいつは残念だね～、奥の階段から2階に上がって一番右端の部屋だよ、ゆっくりしていっておくれ」

そしてアリス、システア、グゥは階段を上って部屋に向かった。

そして、宿の1室

アリス「もう、あんなこと言われたら冗談でもびっくりしますよ」

システア「ん？私としてはお前みたいな娘なら欲しいと思うぞ？」

などと、システアは意地悪そうにニヤついている。

アリス「もう・・・」

グゥ「クゥ～ン？」

システア「それより、腹が減っただろう？飯を頼んでくる、少し待っててくれ」

アリス「・・・わかりました」

そして、システアは1階の従業員にご飯を部屋に持ってきてもらうように頼むと、すぐ上に上がろうとした。

しかし、その時、誰かに呼び止められた。

？「師匠！師匠じゃないですか！？」

システア「この声・・・まさか・・・」

恐る恐る後ろを振り向くと、赤い髪を短く切ったアリスと同年代頃の少年がシステアに向かって走ってきた。

少年「師匠！お久しぶりです！こんな所で会えるなんてこれぞ神の導き！！」

システア「リック・・・なぜここに・・・」

リック「師匠がまた旅に出て行ってから自分なりに腕を上げて師匠のことを探していたんです。今なら師匠に認めてもらえると思って！」

システア「そ・・・そうか・・・」

リック「師匠は今、ここに泊まってるんですよね？」

システア「ま・・・まあな・・・2階の右端の部屋だ」

リック「そうですか！ではこんな所ではなんなので師匠の部屋に行ってもいいですか？色々話したいこともたくさんあるんです！それじゃあ、先に行ってますよ！」

そう一方的に話を終わるとリックはシステアの部屋に向かってしまった。

システアは一瞬固まっていると、ふと我に返り急いでリックの後を追って部屋に向かった。

リックが部屋に入るとそこには銀色の髪を腰まで伸ばした美しい少女が服を着替えている最中だった。

綺麗な白い肌に銀色の髪が実によく似合う、そんなことを思ってい

るとその少女が話しかけてきた。

アリス「あの・・・どちらさまですか？」

グゥ「ウォン？」

リック「え！？えっと！俺はその・・・」

台詞を言い終える前にリックの頭に強い衝撃が加えられた。

システア「この馬鹿が！さっさと出て行け！」

リックに追いついたシステアは、部屋から少し入った所で扉を開けたまま立ち尽くすリックを見て中を覗き、すぐさま拳骨を叩き込み部屋から摘み出した。

しばらくして着替えが終わったのかリックは部屋に呼ばれた。

リックの目に飛び込んできたのは黒い丈の長いスカートのような少しフリルのついた寝巻きを着たアリスだった。

ちなみに、その服は寝巻きが少ないアリスにシステアがこの宿に来る途中に買ったものだ。

少しの間、リックがアリスに見とれているとシステアが咳払いをして話し始めた。

システア「さて、お前たちは初対面だからな、まずは自己紹介からだ」

アリス「あ、私アリス＝レファルです、よろしくね？」

リック「お・・・俺・・・僕はリック＝ザハル、リックって呼んでください！」

アリス「私もアリスでいいです、こっちは友達のグゥ、グゥ、挨拶は？」

グゥ「ウォン！」

アリス「ふふ、よろしくって」

リック「よ、よろしく！」

アリス「あなたはシステアさんのお知り合いですか？」

リック「いえ！僕はシステアさんの弟子です！」

その瞬間、あたりの空気が一瞬固まった。

第17話　身分証作成

アリスがシステアを見ると、システアはやれやれと言った様子で話し始めた。

システア「こいつは何年か前、魔物に襲われていた所を私が助けたのが縁で知り合ったんだが・・・」

リック「はい、その時、この人こそ僕が教えを請うべき人だと確信したのです。」

システア「で、まあ、それ以来弟子にしろ弟子にしろとうるさくてな」

リック「例え何度断られても僕はシステアさん以外の人に教わる気はありません！」

システア「まったく・・・変わらんな・・・」

リック「そういえば、アリスの方は師匠とどう言った関係で？」

アリス「え？私ですか？私は・・・」

アリスはシステアの方を見るとシステアは首を縦に振った。

もしかしなくてもアリスの口から言えということだ。

アリス（なんで私が言わないといけないんですか！）

システア（私から言ったってどうせ聞かない、それよりお前から言ってその後私が認める方がダメージがでかいだろ）

アリス（ダメージってなんですか、ダメージって・・・）

などと目で会話をしていた二人だったが、システアがアリスに真剣な表情で頼む、と、ジェスチャーしてきたため、渋々自分から切り出すことにした。

リック「アリス？」

アリス「あ、はい！」

リック「なんか難しい顔してたけど大丈夫？」

アリス「あ、うん、大丈夫・・・」

リック「で？結局アリスは師匠とどう言った関係なんです？」

アリス「・・・弟子です」

リック「へえ、御弟子さんだったんですか～・・・弟子？」

アリス「弟子です」

リック「弟子・・・し・・・師匠・・・？」

そう言ってリックはシステアの方を見つめた。

だが、そこにシステアからとどめの一言が発せられた。

システア「まあ、そういうことだ、そいつは間違いなく私の弟子だ。ギルドの規則で魔道師の弟子は一人までと決められているからな、大人しく諦めてくれ」

リックは呆然としていたが、すぐ我に返るとシステアに詰め寄った。

リック「師匠・・・嘘ですよね・・・師匠の弟子は俺ですよね・・・！？」

システア「何度も言わせるな、私の弟子はアリスだ。お前じゃない」

リック「そ・・・そんな・・・」

リックはその場に崩れ落ちた。

しばらく打ちひしがれていたリックだが、再び起き上がりアリスの方に向き直った。

リック「アリス、君はシステアさんの弟子なんだな・・・？」

アリス「い・・・一応そういうことになってます・・・」

リック「そうか、わかった・・・明日の昼頃、冒険者ギルドに来てくれ、待ってるから」

それだけ言うと、リックはシステアとアリスに一礼して肩を落として部屋から出て行った。

アリス「あの！・・・行っちゃった。お昼に冒険者ギルド？」

システア「まあ、一応行ってやろう、なにかあるんだろう」

アリス「なにを他人事みたいに・・・所で、なんでそこまで彼を弟子にしなかったんですか？」

システア「まあ、色々あってな・・・」

アリス「そうですか・・・」

なにか事情がありそうだったので、アリスはそれ以上詮索しないことにした。

そして、リックが部屋を出て行ってからしばらくして部屋に料理が運ばれてきた。

料理を食べ終えた二人はその日は遅いため、すぐ床についた。

ちなみに、この世界では、汗を流す時はシャワーのようなものがあり、宿に泊まった時は、宿代とは別に金を払いそれを利用する。

ただ、利用可能時間は、朝と夕方頃の2回だけなので今日は二人とも諦めた。

翌朝

朝食を取りシャワーを利用した二人は、まず魔道師ギルドを尋ねるため、グゥも連れ町に繰り出した。

大道りは人が大勢いて、朝から賑やかだ。

宿の前の道をさらに城の方角へと歩いてしばらくすると、魔道師ギルドと思われる施設に着いた。

３階建てで、昨日の宿より一回り小さいくらいの建物だ。

中はペット禁止のようなのでグゥには外で待っていてもらう。

二人は早速中に入って受付の所へ向かった。

受付に行くとシステアと同じ年頃の赤い髪を後ろでポニーテールのように結んだ女性が居眠りをしていた。

女性「ふふ・・・金貨がいっぱい・・・」

アリス「あの・・・すいません・・・」

女性「この金貨は私のだからね！・・・ふふふ・・・」

システア「アリス、少しどいてろ」

そう言ってアリスを横に下がらせると、システアも少し受付から離れ初歩中の初歩の魔法、アクアボールを作り出し眠っている受付嬢の上に投げつけた。

女性「う？」

一瞬、受付嬢が目を開けた瞬間、飛んできたボールが受付嬢に着弾する前に、火に包まれ一瞬で蒸発した。

アリスが驚いていると、受付嬢は体を起こし、二人の方に顔を向け

て言った。

女性「私の金貨知りませんか？」

システア「知らん、それより仕事中に居眠りなどするな」

女性「なんだ・・・夢か～、あれ？良く見ればシステアじゃない、どうしたの？」

システア「ああ、カードの発行のためここに来た」

女性「発行？」

システア「私の弟子用のカードだ」

アリス「えっと、こんにちは」

女性「弟子取るんだ？あの子がっかりしてるだろうな～」

アリス「あの・・・貴方は？」

女性「うん？私はミナ＝ザハル、よろしくね～」

アリス「アリスです、よろしくお願いします。所でザハルって、もしかしてリックの？」

ミナ「おお、家の弟に会ったの？お察しの通り、姉で～す」

アリス「あ、やっぱり」

システア「おい、それより先にやることがあるだろ」

ミナ「おお！そうだった。アリスちゃん、ギルドＩＤってわかる？これからそれを作ってもらいます。簡単に言うと身分証だね」

アリス「は、はい」

ミナ「冒険者ギルドはわかる？町の人達からの依頼を冒険者に紹介してる組織なんだけど、そこの依頼を受けるのにもこれから作るカードの提示が必要だから無くさないように気をつけてね？あとの詳しい説明は向こうの冒険者ギルドで聞いてくだ〜い」

そうなげやりそうに言って女性は引き出しから書類を取り出し、アリスに渡す。

ミナ「じゃあそう言う事だから、適当にぱぱっと書いちゃってください」

アリス「は、はあ・・・」

そして、その書類に名前や出身国、などの情報を書き込んで、最後に得意な属性の欄を書く。

アリス（システアさん、これどうしましょう？）

システア（幻と書け、私が証人になるから心配するな）

アリス（はい、じゃあ幻で）

書類を全て書き終えカウンターのミナに渡す。

すると、ミナは少し驚いた様子でアリスを見て言った。

女性「へえ～、特殊属性なんだ、始めて見たよ。面白そうな弟子を取ったね～」

システア「そんなことより、カードはどれくらいで出来そうだ？」

女性「そうね～、恐らく夕方くらいまでかかると思うから、その時また来て？」

システア「わかった、じゃあ失礼する」

ミナ「ちょっと！もう行くわけ！？久しぶりの友達との再会なのに～！」

システア「今は仕事中だろうが、後でまた祝杯でもなんでも挙げてやるから」

ミナ「ほんとに？約束だよ？アリスちゃんもまたね～」

アリス「はい、それじゃあ失礼します！」

用事を済ませた二人は外で待っていたグゥを連れ魔道師ギルドを後にした。

魔道師ギルドからの帰り道

システア「まったく、変わってないなあいつは」

アリス「お友達ですか？」

システア「まあな、また今度機会があれば話そう」

などと会話していた二人は、その後、とりあえず昼までの時間潰しの為、しばらく町を散歩することにした。

第１７話　身分証作成（後書き）

ちょっと忙しくて更新が出来ませんでした。
読んでくれている方、ありがとうございます。
いままでのように毎日はきついかもしれませんが出来る限り早く、
これからも更新していきたいと思いますのでよろしくお願いします。

第１８話　リックの頼み

とりあえず、町を歩き回ってしばらくすると、一軒の武器屋の前に知り合いがいたので声を掛けた。

アリス「ガルシアさん！」

グゥ「ウォン！」

ガルシア「ん？おお、譲ちゃんにシステア、それにグゥだったか？何か買い物か？」

システア「いや、昼から用事があってそれまでの時間つぶしだ」

アリス「ガルシアさんはここで何を？」

ガルシア「俺か？俺は武器を見に来たんだ。少し暇が出来たときは一人で武器屋巡りをするのが趣味でな」

グゥ「クゥ～ン・・・」

システア「寂しい趣味だな」

ガルシア「ほっとけ！！と、忘れる所だった。」

そう言ってガルシアは懐から小さな袋を取り出し、システアに差し出した。

システア「何だ、それは？」

ガルシア「この前、王都の途中で襲ってきた魔物の集団なんだが、討伐依頼が出されていたみたいでな、もっと別の地域にいたはずだったんだが移動してあの休憩所の近くにいたとあの後言われてた」

システア「ギルドの情報が遅れたのか」

ガルシア「そうらしい、それで侘びの意味も込めて結構な額を追加で払ってくれてな、その追加報酬はあんたらの分だ」

システア「と、言ってるが、どうする？アリス」

アリス「え！私ですか？」

システア「当然だ、倒したのはほとんどお前なんだから」

アリス「じゃあ・・・ガルシアさんがもらってください」

ガルシア「おいおい、なんでそうなる？」

アリス「あの戦いで皆結構装備が壊れてたじゃないですか？それの修理代に使ってください」

ガルシア「申し出は正直ありがたいが、でもな～・・・」

アリス「じゃあこうしましょう、もし私が冒険者ギルドで何か依頼をすることになったら、その時は手伝ってくれませんか？」

ガルシア「う～む、わかった、譲ちゃんがそれで良いなら俺もいいぞ、何かあればいつでも言ってくれ」

アリス「はい、その時はお願いします、所で、何かいい武器は見つかったんですか？」

ガルシア「ん？あんまり無いな、普通に使うなら問題ないが俺は力で叩き潰すことが多いからすぐ痛んじまう」

アリス「武器一つ探すのも大変なんですね」

ガルシア「まあな、そういえば、システアは武器持たないのか？」

システア「ん？武器なら一応持っている」

そう言ってローブの中からアリスが持っている短剣と同じ位の大きさの剣を取り出した。

ガルシア「お、おい・・・それ、もしかして魔剣じゃないか？」

システア「よく分かったな？水の魔剣フロレントだ」

そう言って鞘から剣を抜くと、その刃は薄い水色をして光を放っていた。

ガルシア「ほお～、始めて見たな」

アリス「魔剣って珍しいんですか？」

ガルシア「ん？魔剣知らないのか、そりゃあ珍しいさ、1本作るのに魔道師クラスの人間が数人集まり2日～3日、絶え間なく魔力を注ぎ込み続けるんだ。しかも武器の方だってミスリル製しか使えな

いからな」

アリス「す・・・すごいですね・・・」

ガルシア「でもそんな武器を持ってるならなんであの時使わなかったんだ？」

システア「ん？休憩所の時か？無論、本当にどうしようもなくなったら使うつもりでいた。ただ、あまりこの剣に頼りたくなくてな」

ガルシア「理由は聞かない方がいいか？」

システア「いや、別に問題ない、私の恩師の形見なんだ」

アリス「システアさんの？」

システア「ああ、だからあんまり使いすぎると甘えてしまいそうになる」

ガルシア「そうだったのか、なるほどな」

アリス「システアさんの師匠ですか～」

などと話をしていると、城の方角から大きな鐘の音が聞こえてきた。

正午を知らせる合図である。

システア「もうこんな時間か、リックが待っているだろうからそろそろ冒険者ギルドに向かうか」

アリス「そうですね、食事はどうしましょう？」

システア「ギルドには酒場もある、向こうで食べればいい」

アリス「分かりました。じゃあガルシアさん。私たちはこれで」

ガルシア「そうか、俺もしばらくしたら向こうに行くだろうから、その時はまた話でもしようや」

システア「ああ、それじゃあな」

アリス「さようなら～」

グゥ「ウォン！」

そして、アリス達は冒険者ギルドへと向かった。

冒険者ギルドは町の中央にあり、魔道師ギルドの倍近い大きさの2階建ての建物だった。受付からすぐ左に階段があり、右には酒場、その酒場に立てられている掲示板にたくさんの依頼書が貼り付けられていた。

システアとアリスは中に入りリックを探すと、本人が酒場から走ってきた。

リック「待ってました。二人はもう昼食は取りましたか？」

元気そうにしゃべりかけるリックを見て、二人は一瞬動揺したが、それを顔に出すことは無かった。

アリス「ま、まだです。ここで取ろうかと思って」

リック「そうだったんだ、それじゃあ席を取ってるからそっちに移動しよう、システアさんもそれでいいですか？」

システア「あ、ああ、それで構わない」

そして3人と1匹は席に向かった。

ちなみに、魔道師ギルドと違い冒険者ギルドはペットも一緒に入れる。

席についた3人は適当に料理を注文した。

注文が完了すると、早速リックが口を開いた。

リック「二人とも、ここまで来てくれてありがとう」

システア「それは良いが、呼んだ理由はなんだ？」

リック「はい、実は頼みがあります」

アリス「頼み？」

リック「僕がずっとシステアさんに弟子入り志願をしていたのは知ってる？」

アリス「う、うん、システアさんから聞いた・・・」

システア「なんだ？アリスに勝負でも挑むか？」

リック「ち、違います！」

システア「違うのか？」

リック「はい、システアさんが選んだ人ならきっと素晴らしい才能を持った人だというのはわかります。」

アリス「いや、そんなこと・・・」

リック「頼みは別のことです。是非アリスの力を見せてほしい」

アリス「私の？」

リック「システアさんが弟子に選んだ人なら間違いなくすごい力を持っているはずだ。頭ではわかってるんだけど・・・」

システア「実際力を見ないと納得できないか？」

リック「はい・・・」

アリス（なんか・・・どっかの誰かと似てる・・・）

リック「どうだろう、だめか？」

システア「一つ聞きたい、もしアリスがお前を納得させる力を見せられなかったら？」

リック「もし、そうなっても文句は言いません。決まったことをぐちぐち言ってもしかたありませんから、あくまでも、僕自身を納得

させるためというのが理由です。」

システア「そうか、なら私からは何も言わない、アリスが決めろ」

アリス「・・・力を見る方法は？」

リック「これを」

そう言ってリックが取り出したのは1枚の依頼書だった。

リックはアリスをしっかり見つめて言った。

リック「この町のすぐ近くの森で魔物が出たんだけど、その魔物の討伐依頼に一緒に来て欲しい」

第１８話　リックの頼み（後書き）

今日ＰＶ５０００、ユニーク１０００達成しました。
読んで下さる皆さんのおかげです。
本当にありがとうございました！
続きも早く投稿出来るようがんばります！

第19話　身分証完成と初依頼

アリス「魔物討伐？」

リック「ああ、ここからそれほどかからない、うまくいけば1日で終わるはずだ。」

システア「その依頼のランクは？」

アリス「ランク？」

リック「冒険者ギルドの依頼にはランク付けがされていて、一定の功績がないと上位ランクの依頼は受けれないんだ。ランクはEからSまである、それとこの依頼のランクだけどCランクとなっている。」

システア「Cか、私が同行しても問題はないか？」

リック「むしろこちらからお願いしようと思っていたくらいですから助かります。」

アリス「Cって難しいですか？」

システア「そうだな・・・お前が私と始めて会った時に戦っていたレッグベアがいたろう？大体あいつくらいの魔物だ」

アリス「え～・・・」

グゥ「クゥ～ン・・・」

システア「まあ今のお前ならあの程度の魔物なら問題ないだろう」

リック「レッグベアをあの程度扱いとは、さすがですね」

システア「出発は？」

リック「明日朝から出発する予定です」

システア「なら大丈夫だな」

リック「？」

システア「いや、アリスのカードが出来るのが今日の夕方なんだ」

リック「ああ・・・なるほど・・・」

リックは一瞬複雑そうな顔をしたが、システアは気づかない振りをして、すぐ話題を切り替えた。

システア「そうだ、せっかくだからこちらからも提案があるんだが」

リック「提案、何でしょう？」

システア「もう一人、こちらから同行者を出したい、構わないか？」

リック「システアさんの紹介ならかなりの実力者なんですよね？」

システア「うむ、少なくとも足を引っ張ることはないだろう」

リック「僕は構いませんよ、その人はすぐ呼びますか？」

システア「いや、明日町を出る門の所で待ち合わせをしようと思う」

リック「わかりました」

システア「アリスも、構わないか？」

アリス「あ、はい」

システア「なら、決まりだな」

そして魔物討伐が正式に決まりアリス達は運ばれてきた食事を取り、少し雑談をしてリックと別れた。

カードが出来るまでまだ時間がありそうだったので、少し町の服屋などを見て周りながらアリス達はゆっくりと魔道師ギルドを目指した。

ギルドについた頃には日も大分傾いており、丁度良い時間になっていた。

再びグゥを外で待たせ、二人がギルドに入ると、受付にいたミナはすぐに気付き、カウンターから出てくるとアリスにカードを手渡した。

ミナ「今さっきカードが届いたのよ～！」

アリスに手渡されたカードは、表面が鈍い銀色の美しいカードだった。

ミナ「ふふん！どうこれ！アリスちゃん用の特注なのよ～！」

システア「お前が作った訳でもないくせに偉そうにするな」

アリス「なんで特注！？」

システア「特殊属性使いの人間は判断がしやすいようにそう決まってる、空なら金色、時なら黒、銀ならそのようにな、ちなみに、通常の冒険者は白で、魔道師は出身国によって青色、赤色、緑色、茶色で分けられる」

アリス「そうなんですか、う～ん、でも黒はともかく、金色ってちょっと悪趣味ですね、なんか成金っぽくて私は好きじゃないかも」

システア「そ、そうか？まあとにかくすぐに分かるようにという配慮だ」

アリス「なるほど・・・あれ？そういえば私の冒険者ランクってどうなるんですか？」

システア「ああ、それは」

とシステアが言いかけた所でミナが間に割り込んで勝手に説明を始めた。

ミナ「なんだ～、向こうで聞かなかったんだ。なら教えてあげよう！冒険者にも依頼にもE～Sまでのランクがあるの、普通冒険者に成立ての人はEから始まって、自分に見合うランクのクエストをこなして行くとギルドに認められてランクが上がるんだけど、魔道師

の弟子というアリスちゃんの場合は、いきなりCランクまで受けることができるの」

アリス（ミナさんって実は説明好きなんじゃないのかな？）

と、思ったアリスだったが口には出さなかった。

アリス「なんだかその話を聞くとちょっとずるいって自分でも思っちゃいますね・・・」

ミナ「まあそれが魔道師の優遇の一つだからね、中には不満を持ってる人も多いとおもうよ？でも実際魔道師になるにもある程度の実戦経験が必要だし、何か大きな問題が起こったら真先に動かないといけないし、だから戦力になるのは確実だしね、ちなみに魔道師になればその瞬間からBランクが与えられるよ～、そういえば優遇のことは知ってる？」

アリス「少しだけシステアさんに聞きました。」

ミナ「ならこれの説明はいらないかな？面倒だしね～」

アリス「は、はい・・・」

システア「話は終わったな？じゃあミナ、少し時間いいか？」

ミナ「おお！何々！もう上がりだから大丈夫だよ～？」

システア「ああ、実は、明日近くの森までピクニックをしようかと思ってるんだが」

アリス「え！？」

ミナ「ピクニック！？いいねいいね～！楽しそう！」

システア「お前との再会を祝って大自然の中で存分に羽を伸ばそうと思っているんだ、どうだ？明日時間あるか？」

ミナ「全然大丈夫！今から休暇申請するから！もし通らなくても無視するから心配無用！」

システア「受付としてどうなんだ・・・？まあいい、なら明日、北門の所に朝、集合でいいな？」

ミナ「よっし！任せて！絶対寝坊なんてしないから！」

と、ミナにピクニック《討伐協力》の約束を取り付けたシステアは、アリスを連れてさっさとギルドを後にした。

第１９話　身分証完成と初依頼（後書き）

更新、遅くなってごめんなさい、出来れば1日1話投稿したい所なんですが、中々難しいですね、読んでくれている皆さん、ありがとうございます。少しずつでもしっかり書いていきます。

第２０話　宿屋の女の子

ギルドを後にしたアリス達は宿に向かって日が傾いた道を歩いていた。

横で歩いているアリスは腑に落ちないという顔をしていたのでシステアが話し始めた。

システア「なんでピクニックなんて言ったか気になってるのか？」

アリス「はい、あんなに楽しそうだったのにちょっとひどいと思います・・・」

グゥ「クゥ～ン？」

システア「あいつ、面倒事はあんまりしない主義だからな、ああでも言わないと来ないかもしれなかったからだ」

アリス「なんでミナさんを誘ったんですか？私はガルシアさんを呼ぶと思ったんですけど」

システア「今回はリックの事でミナに来てもらう必要があった」

アリス「リックの？」

システア「リックが私に弟子入り志願していただろう？」

アリス「はい・・・」

システア「でもな、リックは私の弟子には向いてないんだ」

アリス「？」

システア「あいつが主力に使う属性は火、対して私は水だ。私は一通りの属性魔法が使えるが、リックの主力の火の魔法に関しては、私より得意な使い手が近くにいる、それなら、その人間に教えを請う方がリックのためになるはずだろう？」

アリス「でもリックと同じ属性が得意の魔道師って・・・ミナさん？」

システア「そうだ、リックの姉、ミナは火の魔法に関しては私も天才だと思っている」

アリス「そうは見えなかったですけど・・・って、システアさんはもしかしてリックをミナさんの弟子にするつもりなんですか？」

システア「もうずっと前からそのつもりだった。師にするなら自分に合った人間の方がいいだろう、だがリックの奴、どうしてもミナには教わりたくないようでな、ミナの方はリックが言ってくればすぐ弟子に出来るよう準備はしているんだが・・・ミナはリックの意思を尊重しているから自分からは弟子にしてやるとは言わないだろうし」

アリス「なんでそんなに嫌がるんですか？兄弟なら気兼ねなく教えてもらえそうな物なのに・・・」

システア「その辺りはリックにしかわからないだろう、とにかく、リックもミナと同様火の魔法に関して光るものを持っている、だか

ら私も出来ればミナに任せたいんだ。」

アリス「意外とリックのこと心配していたんですね？」

システア「あの二人を見ているとイライラするだけだ」

と、話をしている内に宿に着いた。

二人は早速1階の酒場で夕食を取ることにした。

食事を待っていると、料理を持った10歳前後の女の子が、お盆に料理を載せて歩いてきた。

女の子「お、お待たせしました。リブナルのスープ、お持ちしました！」

そう言いながら、女の子はフラフラと二人分のスープを持って近づいてくる、何となく嫌な予感がしたアリスは手伝おうと思ったが、その瞬間。

女の子「あ！」

やはりと言うべきか、つまずいてお盆が空を舞い、そのお盆に乗っていた皿がアリスの方へ飛んできた。

その時、アリスはとても冷静に心の中で突っ込んだ。

アリス（やっぱりそうなるんだよね・・・）

などと考えた時、横から風が吹いたかと思ったら向かってくるスー

プと皿を誰もいない通路の方に吹き飛ばした。

女の子「え・・・？」

つまずいて転んだ女の子は、その光景を見ると、立ち上がり驚いた顔をした。

と、同時に厨房の方からこの宿の女将、ソフィアさんが早足でやってきた。

ソフィアさんは、すぐに女の子の方に顔を向けて言った。

ソフィア「なにをやってるんだいルーシー！」

ルーシー「あ、あの、少しでもお手伝いしたくて・・・」

ソフィア「気持ちは嬉しいがあんたに仕事はまだ無理だよ、すまないね、あんた達、服は大丈夫かい？」

アリス「私は大丈夫です。」

ソフィア「すぐに新しいスープを持ってくるからね」

ルーシー「ごめんなさい・・・」

システア「気にしないでくれ、それよりその子は娘か？」

ソフィア「いや、親戚の子供だよ、ここで少しの間だけ預かることになったんだよ」

システア「そうか、こんにちは、システアだ。よろしく」

アリス「私はアリス、よろしくね？」

ルーシー「ル、ルーシーです、よろしくお願いします・・・」

挨拶を済ました所でソフィアが再びルーシーに言った。

ソフィア「ほら、早く奥に戻りなさい、床の掃除はしておくから」

ルーシー「はい・・・」

そう言うとルーシーは少々落ち込み気味で店の奥へと戻っていった。

アリス「元気無かったですね」

システア「ああ」

ソフィア「少し言い過ぎたかね・・」

そして、アリス達は新しく運ばれてきた食事を取り、シャワーで汗を流し、明日に備えて早めに床についた。

第２０話　宿屋の女の子（後書き）

随分と間を空けてしまいました。
読んでくれている皆さん、申し訳ありませんでした。
不定期でもしっかり更新していけるようがんばります。

第２１話　魔物退治の朝

翌日

朝起きたアリス達はシャワーを浴び、すぐに出発の準備を始めた。

システア「今日中には帰れるから大きな荷物はここに置いていけ」

アリス「はい！えっと、替えの服はいりませんか？」

システア「いらん、置いておけ」

アリス「じゃあ化粧品は持っていっちゃだめですか・・・？」

システア「依頼遂行中に壊したくなければおいていけ」

アリス「ですよねー」

システア「心配しなくても取られることは無い」

などと大忙しの朝であったがなんとか準備も完了してすぐ宿を出るために出口へ向かう。

ちなみに、化粧品は町を見て回っている時にアリスが見つけ、気に入って買った物だ。

香水や口紅などが一通りセットで入れることができる木製の化粧箱もおまけでついてきた。

二人が宿を出ようとすると、途中でソフィアさんに会った。

ソフィア「おや、おはよう、随分早いね、どこか行くのかい？」

アリス「はい！これから魔物の討伐に行くんです！」

システア「森の中で暴れているという魔物だ」

ソフィア「おや、そうだったのかい、あの森では色々な山菜が取れるんだよ、あたしも時々取りに行くんだけどね、今は魔物のせいで立ち入り禁止になってて困ってたんだよ、応援してるからなんとか退治しとくれよ！」

アリス「はい、がんばります！」

システア「期待していてくれ」

グゥ「ウォン！」

そう言ってアリスたちはリックやミナが待っている町の北門の方へと歩き出した。

その後を少し離れた所からこっそりついていく小さな影と共に。

門の前に着くとリックは先に来ていたが、まだミナの姿は無かった。

こちらを見つけたリックは手を振りながらアリスたちに向かって歩いてきた。

リック「おはようございます。」

アリス「おはよう！」

グゥ「ウォン！」

システア「おはよう、早いな」

リック「こちらから頼んだのに遅刻なんて出来ませんから、所で、もう一人来ると聞いていたんですが」

システア「ああ、あいつならそろそろ来るだろう」

と、システアが言った直後、大きな声でシステア達を呼ぶ声が聞こえた。

ミナ「ごめーん！準備に手間取っちゃった！」

やってくるミナの姿を見たリックは途端に顔をしかめた。

リック「なんで姉さんがここにいるんですか・・・？」

リックはかなり不機嫌そうにミナに向かって話しかけた。

しかし、それをまったく気にした様子もなくニコニコとしながらミナは答えた。

ミナ「なんでって・・・そりゃあピクニックのために決まってるじゃない！って、あれ？なんでリッ君がここに？」

リック「その呼び方はやめて欲しいと言わなかったかな？」

ミナ「いいじゃない、呼びやすいし！」

リック「それならリックで良いでしょう・・・一文字多くなってるし・・・ってピクニック？」

ミナ「うん、ピクニック、システアが久しぶりに会ったから一緒にピクニックに行かないか？って」

リック「ああー、なるほど、そう言う訳ですか」

そう言ってリックはシステアに視線を向けた。

システア「なんだ？ピクニックも魔物討伐も似たようなものだろ」

ミナ「えー！魔物退治ってどういうことシステア！私との話は嘘だったの！？私弄ばれてたの！？」

リック「まあ、誰でも連れてきて構わないと言ったのは僕ですから、姉さんが同行するのには反対しません。実力も・・・まあ一応は認めてますし」

システア「そうか、なら何の問題もないな」

リック「でも、あなたの思い道理にはなりませんよ？」

システア「そうかな？」

リックとシステアはそう言ってお互い睨み合った

ミナ「あの～、私の意見は無視？と言うか発言も無視？お願いだから無視だけはやめて～！」

アリス「なんか、ミナさんの扱いがわかった・・・」

グゥ「クゥ～ン？」

そして、やっと魔物討伐に出かける一行であった

？？？「楽しそう・・・」

その後ろを少し離れてこっそり追う小さな人影、一筋縄ではいかない魔物退治の始まりである。

第２１話　魔物退治の朝（後書き）

こんにちは、お久しぶり、はじめまして、そして明けましておめでとうございます。長らく更新が止まっていて失踪疑惑も醸し出していた迷いの森です。言い訳をさせていただくと長～くなるので一言だけ、すいませんでしたｏｒｚ
少し立て込んだ事情で更新が止まっていましたが、これからゆっくり更新していきますのでどうかお許しを、そして今年は良い年になるよう心から祈っております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2313w/

ユースティアの少女魔道師

2012年1月14日01時47分発行